

平安京左京三条三坊九町跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇〇六―一五

平安京左京三条三坊九町跡

2006 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京三条三坊九町跡

2006 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平米から、数千平米におよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたびマンション新築計画に伴います平安京跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

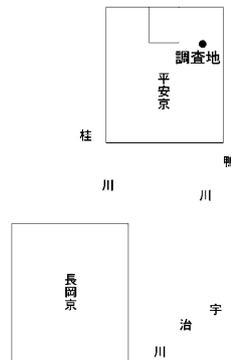
平成 18 年 11 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京左京三条三坊九町跡
- 2 調査所在地 京都市中京区両替道二条下る金吹町地内
- 3 委 託 者 イースペース株式会社 代表取締役 井元一也
- 4 調査期間 2006年7月21日～2006年9月12日
- 5 調査面積 183 m²
- 6 調査担当者 大立目 一
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「聚楽廻」「御所」「壬生」「三条大橋」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡測量基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺構番号 調査区ごとに通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 13 遺物番号 種類ごとに通し番号を付し、写真も同一とした。
- 14 掲載写真 村井伸也・幸明綾子
- 15 遺物復元 村上 勉・出水みゆき
- 16 自然遺物分析 竜子正彦
- 17 基準点測量 宮原健吾
- 18 本書作成 大立目 一
- 19 編集・調整 中村 敦・児玉光世・近藤章子・櫻井みどり・山口 眞
- 20 漆器の分析 北野信彦氏（くらしき作陽大学）

にお願ひし、付章で概説を執筆していただいた。



（調査地点図）

0 2 4km

目 次

1. 調査経過	1
2. 遺 構	4
(1) 基本層序	4
(2) 遺構の概要	4
(3) 1区第1面の遺構 江戸時代前期から中期	5
(4) 1区第2面の遺構 室町時代・桃山時代から江戸時代初頭	6
(5) 2区第1面の遺構 江戸時代前期から中期	8
(6) 2区第2面の遺構 桃山時代から江戸時代初頭	11
(7) 2区第3面の遺構 平安時代・室町時代後期から桃山時代	14
3. 遺 物	21
(1) 遺物の概要	21
(2) 土器・陶磁器類	21
(3) 木製品	29
(4) 漆器	32
(5) 瓦類	33
(6) 金属製品	34
(7) 銭貨	34
(8) 石製品	34
(9) 土製品	35
(10) ガラス製品	36
(11) 骨角製品	36
(12) 土壌サンプル分析	36
4. ま と め	37
5. 付章 漆器資料の材質・技法に関する調査	40
(1) はじめに	40
(2) 出土漆器の調査	40

図版目次

図版1	遺構	1	1区第1面全景（北から）
		2	1区第2面全景・堀状遺構SX 8（北から）
図版2	遺構	1	1区路面状遺構14（西から）
		2	1区堀状遺構SX 8北壁（南から）
		3	2区第1面全景（北東から）
図版3	遺構	1	2区第2面全景（北東から）
		2	2区第3面全景（東から）
図版4	遺構	1	2区柵SA003A・B（西から）
		2	2区井戸SE 2（東から）
		3	2区柵SA004（東から）
図版5	遺物		1区SX 8・2区SX82出土土器
図版6	遺物		2区SX10出土土器

挿図目次

図1	調査位置図（1：2,500）	1
図2	調査区配置図（1：1,000）	2
図3	周辺の調査（1：2,500）	2
図4	調査前全景（東から）	5
図5	調査風景（南東から）	5
図6	1区路面状遺構14（1：50）	5
図7	1区第1面平面図（1：100）	6
図8	1区第2面平面図（1：100）	6
図9	1区北壁・南壁・東壁断面図（1：80）	7
図10	2区石室SX 1実測図（1：50）	9
図11	2区建物礎石列SB001実測図（1：50）	10
図12	2区建物柱穴列SB002実測図（1：50）	11
図13	2区井戸SE 2実測図（1：50）	12
図14	2区廃棄土壌SX10実測図（1：50）	12
図15	2区柵SA003A・B実測図（1：50）	13

図 16	2区柵 SA004 実測図 (1 : 50)	15
図 17	2区柱穴 Pit12 実測図 (1 : 40)	15
図 18	2区柱穴 Pit196 実測図 (1 : 40)	15
図 19	2区柱穴 Pit130 実測図 (1 : 40)	15
図 20	2区柱穴 Pit128 実測図 (1 : 40)	15
図 21	2区第1面平面図 (1 : 100)	16
図 22	2区第2面平面図 (1 : 100)	17
図 23	2区第3面平面図 (1 : 100)	18
図 24	2区西壁断面図 (1 : 80)	19
図 25	2区南壁断面図 (1 : 80)	20
図 26	1区 SX 8 出土土器実測図 (1 : 4)	22
図 27	2区 SX82 出土土器実測図 (1 : 4)	24
図 28	2区 SX10 出土土器実測図 (1 : 4)	26
図 29	2区 SX10 出土須恵器鉢実測図 (1 : 4)	28
図 30	2区 SX10 出土須恵器鉢	28
図 31	2区 SK27 出土土器実測図 (1 : 4)	28
図 32	1区 SX 8 出土木製品実測図 (1 : 4)	30
図 33	2区 SX10 出土木製品実測図 (1 : 4)	31
図 34	1区 SX 8、2区 SX10・SX82 出土漆器実測図 (1 : 4)	32
図 35	軒瓦・飾り瓦拓影・実測図 (1 : 4)	33
図 36	軒瓦・飾り瓦	34
図 37	金属製品実測図 (1 : 2)	34
図 38	銭貨拓影 (1 : 2)	34
図 39	石製品実測図 (1 : 4)	35
図 40	土製品実測図 (1 : 4)	35
図 41	2区 SX10 出土ガラス製品実測図 (1 : 1)	36
図 42	2区 SX10 出土骨角製品実測図 (1 : 2)	36
図 43	1区 SX 8・2区 SX10 検出自然遺物	36
図 44	近世以降の漆器 (挽き物類) の木取り方法	43
図 45	漆塗り構造の分類	43
図 46	漆器木材顕微鏡写真	44
図 47	漆塗り構造 I 顕微鏡写真	44
図 48	漆塗り構造 X 顕微鏡写真	44
図 49	漆塗り構造 VII 顕微鏡写真	44

表 目 次

表1	周辺の調査一覧表	3
表2	遺構概要表	4
表3	遺物概要表	21
表4	1区SX 8・2区SX10 検出自然遺物分類表	37
表5	漆器観察表	42
表6	ろくろ挽き物の用材分類一覧表	43
表7	漆器成分分析表	44

付 表 目 次

付表1	1区堀状遺構SX 8 出土掲載土器一覧表	45
付表2	2区土壙SX82 出土掲載土器一覧表	45
付表3	2区廃棄土壙SX10 出土掲載土器一覧表	45
付表4	2区土壙SK27 出土掲載土器一覧表	46

平安京左京三条三坊九町跡

1. 調査経過

調査地は二条通・室町通・両替町通に囲まれた区域で、平安京では左京三条三坊九町の北端部中央よりに該当する。周辺には有力貴族、皇族の邸宅が数多く営まれていた。九町には平安時代後期には西半を藤原俊忠、東半を白河法皇、待賢門院藤原璋子の臨時御所となった二条烏丸第が存在したことが文献に記されているが正確な所在は不明である。

室町時代には、市中の警護など自治権を得るなど栄華を誇った法華宗寺院の妙顕寺、妙覚寺が、上京と下京を結ぶ室町通の東に位置し、京都町衆の活発な共同体的町が発達した場所であることは洛中洛外図などからうかがわれる。見て取れる。そして安土・桃山時代には織田信長が、名園の誉れ高い二条御池殿の所有者二条家を立ち退かせ、京都の拠点として二条殿御池城を造営したとされる推定地に隣接している。その後は天正十八年（1590）に豊臣秀吉による都市改造、いわゆる天正地割により周辺は方1町区画の中央に南北方向の街路が増設された。江戸時代に入ると二条城建設など徳川政権の新たな都市改造が進められ、両替町通には慶長13年（1608）に道路に沿って金座・銀座・朱座が設けられ、商業の町としてよりいっそう賑わいを見せながら現在に至る地域である。

調査地周辺では同じ九町内でも1989年に秋野々町で発掘調査が行われ、平安時代前期の井戸、平安時代後期の井戸、室町時代の井戸・土壇・ピット、室町時代後期から桃山時代の井戸・土壇・溝・

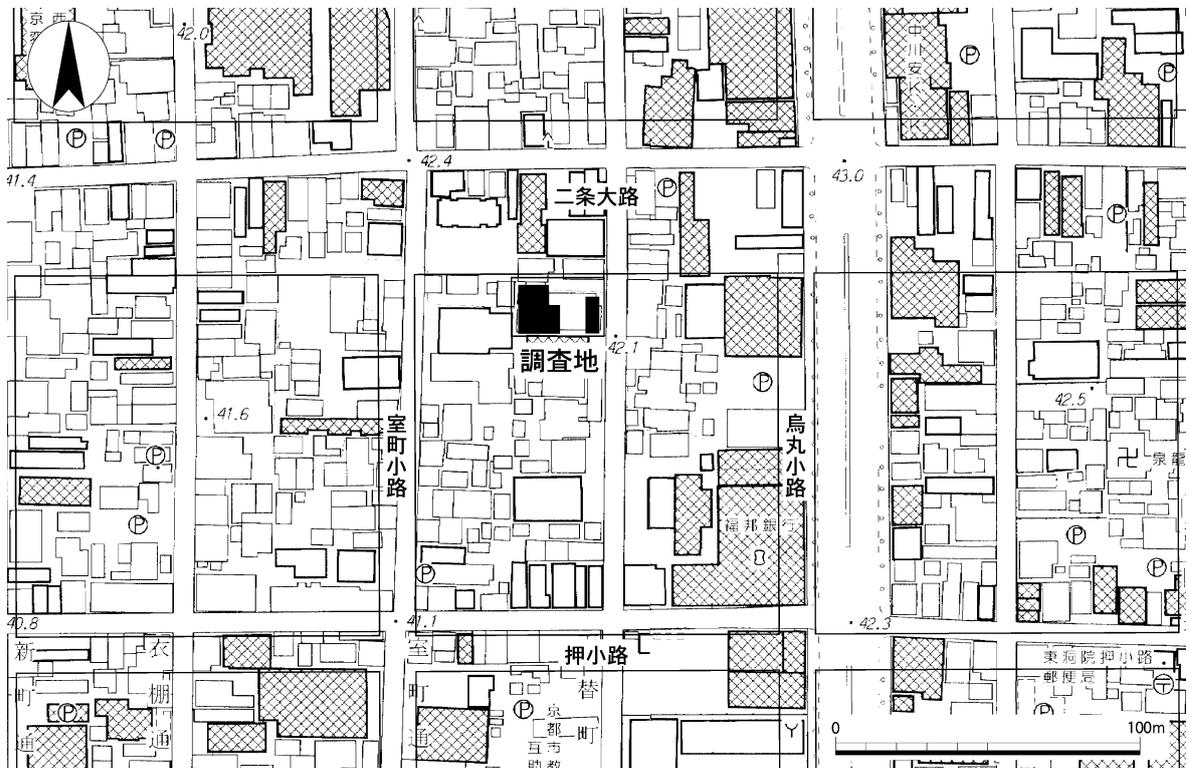


図1 調査位置図 (1:2,500)

二条大路

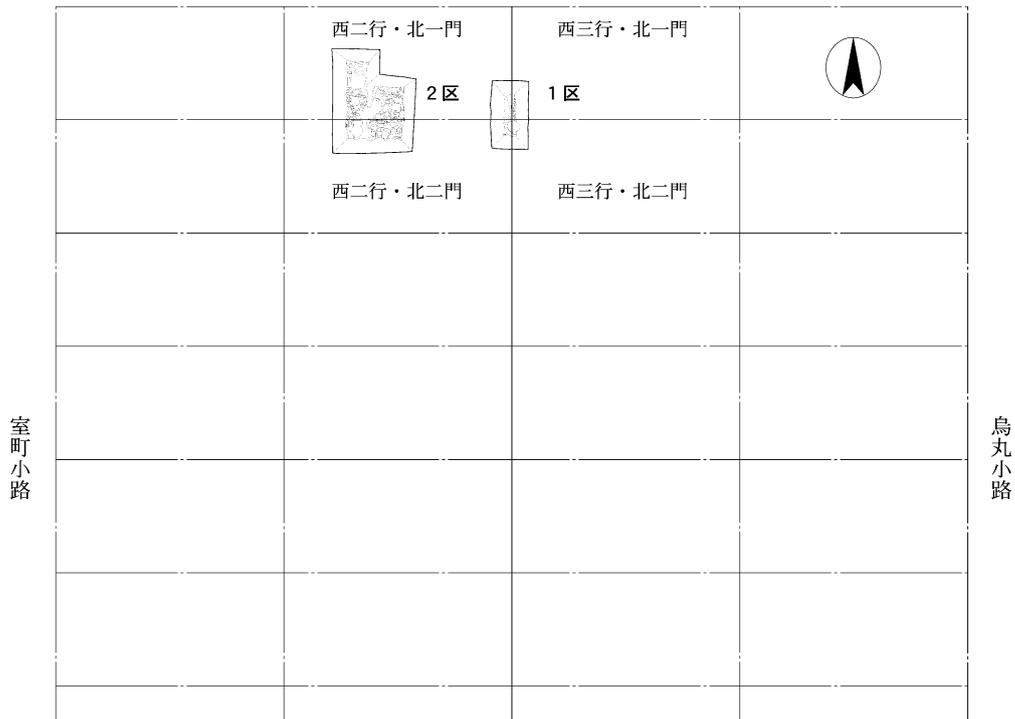


図2 調査区配置図 (1 : 1,000)

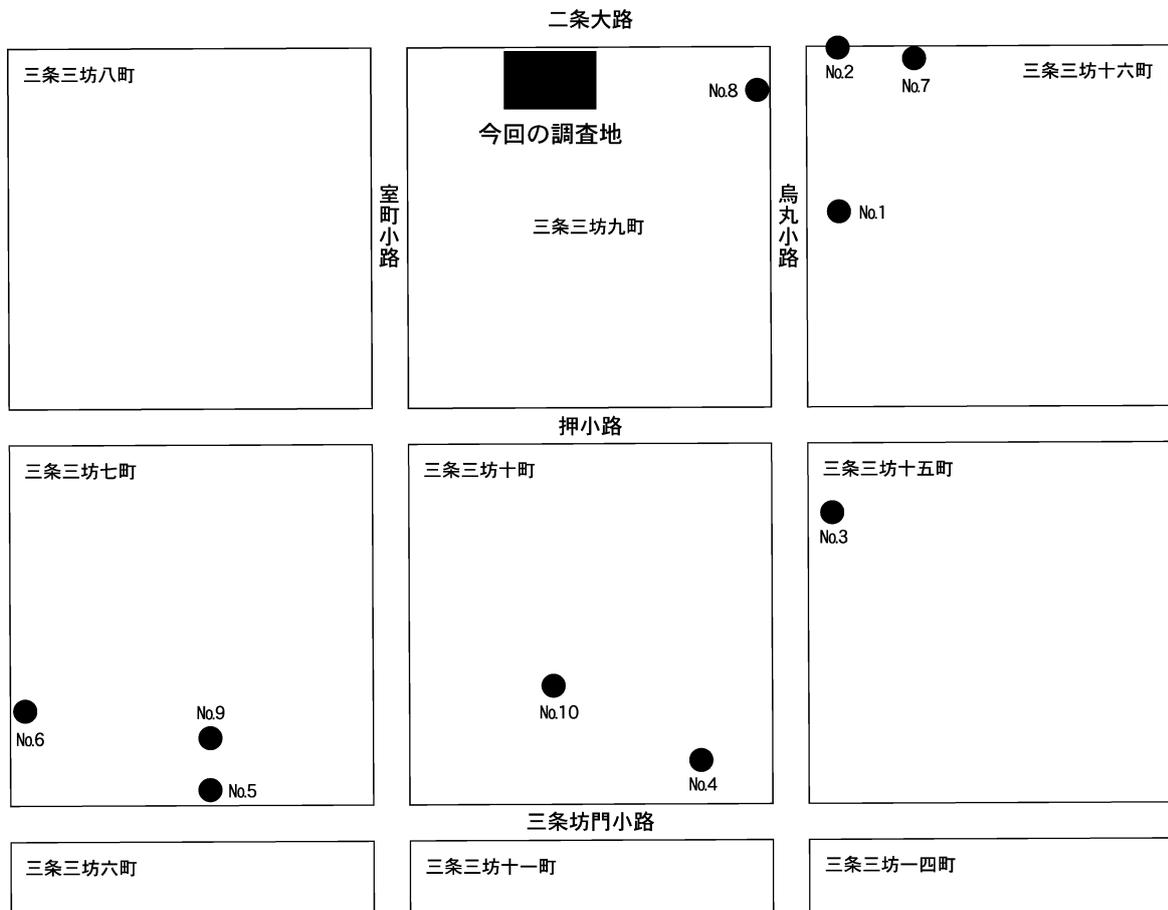


図3 周辺の調査 (1 : 2,500)

表1 周辺の調査一覧表

※ 調査Noは図3に対応

No.	年度	遺跡名	調査法	主な遺構	文献
1	1974	左京三条三坊十六町	発掘	室町時代の土壌、江戸時代の井戸。	「No.4」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅰ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980年
2	1975	左京三条三坊十六町	発掘	室町時代の二条大路南側溝、桃山時代の土壌、江戸時代の井戸・礎石。	「No.19」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅰ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980年
3	1975	左京三条三坊十五町	発掘	室町時代の溝、桃山時代の土壌、江戸時代前期の井戸・土壌。	「No.20」『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅰ』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980年
4	1977 ～ 1980	左京三条三坊十・十一町	発掘	平安時代後期～鎌倉時代の烏丸小路西側溝・井戸、室町時代の溝・井戸・土壌・柱穴、江戸時代の石垣・溝・井戸・石室・土壌・柱穴。	『押小路殿跡 平安京左京三条十一町』（財）古代学協会 1984年
5	1980	左京三条三坊七町	発掘	平安時代後期の南北溝・柱穴、鎌倉時代～江戸時代の土壌。	『平安京左京三条三坊 京都労働金融公庫における発掘調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1981年
6	1981	左京三条三坊七町	立会	平安時代後期の土壌、室町時代の木棺墓・土壌、江戸時代の土壌。	『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 昭和55年度』京都市埋蔵文化財調査センター 1981年
7	1988	左京三条三坊十六町	発掘	平安時代後期の井戸、鎌倉時代後半～室町時代前半の掘込、室町時代後半の二条大路南側溝・井戸・掘込・落込・ピット、桃山時代～江戸時代初頭の掘込・落込・ピット。	『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1993年
8	1989	左京三条三坊九町	発掘	桃山時代～江戸時代前期の土壌・柱穴・井戸・溝・濠・柵列・石垣。	『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1993年
9	1998	左京三条三坊七町	立会	平安時代後期の溝・柱穴、鎌倉時代～江戸時代の池・溝・土壌。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成9年度』京都市文化市民局 1998年
10	2001	左京三条三坊十町	発掘	平安時代～室町時代の井戸・建物・池・石・石垣・土壌・柱穴、桃山時代～江戸時代の石垣・井戸・土壌・柱穴、江戸時代後期の建物・柵・井戸・石室・土壌・柱穴。	『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-7』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2002年

濠状遺構を検出している³⁾。調査地を南に下がった京都労働局の建設工事に伴う2001年の調査（十町）では平安時代中期の井戸、鎌倉時代から室町時代にかけての押小路殿・二条殿の庭園遺構、桃山時代から江戸時代初頭の石垣群、江戸時代前期の建物跡等⁴⁾を検出し大きな成果をあげている。

今回の調査は当地に株式会社イー・スペース株式会社によりマンション新築工事が計画され、事前に京都市文化財保護課により試掘調査が行われた。その結果、江戸時代前期の遺構の存在が確認された。これらの点を踏まえ、発掘調査を江戸時代前期・桃山時代から江戸時代初頭・室町時代後期以前の3面を調査する運びとなった。

発掘調査は調査区を1区・2区の二つに分け同時に作業を進めた。東部に1区（45㎡）の南北トレンチを、西部に2区（138㎡）のL字トレンチを設定し、上部の近現代、江戸時代後期の面を重機で排除し調査を行った。その結果、両区共に大半の遺構が桃山時代から江戸時代初頭の時期幅に属する遺構であり、室町時代後期以前の遺構件数は少数であった。1区においては桃山時代から江戸時代初頭の南北の堀状遺構、路面状遺構、室町時代後期の柱穴を検出し、2区においては江戸時代前期以降の礎石列、石室基底部、柱穴列を、桃山時代から江戸時代初頭の廃棄土壌、土取穴、東西柵、井戸など、室町時代後期においては、北一門・二門ラインに沿う東西柵などが、この調査の主要な遺構となった。

2. 遺 構

(1) 基本層序

1区の基本層序は0.6～0.8mの現代盛土の下に、約0.6mの江戸時代後期の整地層、包含層、その下に0.3～0.4mの江戸時代中期の整地層、路面が堆積する。その直下が1面に相当する江戸時代前期の路面状整地層で約0.3m堆積する。以下は堀の黒褐色粘質土の堆積が0.3～0.6mと灰オリーブ色泥砂、明褐色砂礫の地山となる。

2区の基本層序は0.3～0.8mの盛土の下に、約1.0mの江戸時代中・後期の包含層、整地層、および西部と北部には1.5～1.8mの火災整理層（元治の大火災・1864年）が堆積する。その直下が1面に相当する桃山時代から江戸時代前期の整地面、遺構面である。以下は黄褐色砂泥、黄褐色砂礫、灰オリーブ色砂泥などの地山となる。

(2) 遺構の概要

調査は、当初の計画に基づき江戸時代前期に当たる面から始めた。調査の結果、江戸時代中期から室町時代後期までの遺構を18基検出した。その種類は堀・路面状遺構・柱穴・井戸・土壇などである（表2）。狭い調査区で遺構数は限られたが桃山時代から江戸時代初頭の堀、路面状遺構が主要遺構となる。

2区も同様に江戸時代前期に当たる面から調査を始めた。各所に火災の整理跡が見られ、調査

表2 遺構概要表

地区	時代	主な遺構	概 要
1区	江戸時代中期	井戸SE1	漆喰、棧瓦を含む、漆喰井戸の可能性、東西杭列を伴う
	江戸時代前期	路面状遺構14	拳大の礫と小礫が敷かれ、2面を検出
	桃山時代～江戸時代初頭	濠状遺構SX8	路面14の下より検出、南北方向の濠、土器類、木製品多し
	室町時代後期	柱穴列	南北方向、室町時代後期の土師器混じる
2区	江戸時代前期以降	井戸SE21	円形の漆喰井戸の可能性
		建物礎石列SB001	東西方向の建物礎石列、真北に対し東に3°振る
		建物柱穴SB002	南北方向の建物柱穴列、根固めの栗石が残存
		石室基底部SX1	東西方向の石室基底部、東端の1段目の石と、礫敷き床面検出
	桃山時代～江戸時代初頭	井戸SE2	円形の桶組井戸、桶のタガ跡痕跡が残存
		土壇SK10	廃棄土壇、西に杭跡が残存、土器類、木製品多し、SD90を伴う
		土壇SK82	不整形な方形土壇、土取穴
		柵SA003A・B	床面に東西方向に2列並ぶ
		土壇SK131	土取土壇
		土壇SK101	東西に長軸を持つ方形土壇
		土壇SK4	柵SA003A・Bの床面下の土取土壇（第3面で検出）
		土壇SK136	土取穴（第3面で検出）
	室町時代後期・平安時代	柵SA004	東西方向、北一門・北二門境界推定ラインに6.5m並ぶ
		柱穴群	北一門・北二門境界推定ライン以北4m間に散布する
柱穴Pit128		平安時代前期の柱穴遺構	



図4 調査前全景（東から）



図5 調査風景（南東から）

区内において江戸時代後期の火災の整理・造成は、それ以前の多数の遺構群までも削平した様相がみられた。調査の結果、平安時代から江戸時代中期までの遺構を214基検出した。その種類は井戸・建物礎石列・建物柱穴列・石室基底部・柵・土塋などである。時期的には桃山時代から江戸時代初頭に属する遺構が主要遺構となる。この章では1区・2区と2箇所に分かれているため、各調査区ごとに時代を追って遺構の概説を記していく。

（3）1区第1面の遺構 江戸時代前期から中期（図7、図版1）

第1面を江戸時代前期の面として捉え調査を開始した。主な遺構には井戸SE21、杭跡Pit 1～4、路面状遺構14がある。路面状遺構14を除き江戸時代中期の遺構群と考えるが、同一面で確認した新しい遺構についても概説しておく。

井戸SE 1 調査区の南部に位置する井戸。掘形平面形は楕円形を呈し、規模は東西1.7 m以上、南北は1.7 m。深さは0.1 m以上。トレンチ上場からの高低差を考え安全上から掘削を中断した。掘形は直に落ち、東肩は調査区外に伸びる。埋土は暗灰色泥土が堆積し井戸の構造物、部材は検出していない。埋土に漆喰を多量に含むため漆喰井戸であった可能性がある。出土遺物は漆喰片、棧瓦、信楽の鉄釉甕片があり江戸時代中期に属する。

杭跡（杭1～4）井戸の北に隣接して杭跡を4基東西方向に検出した。直径0.1～0.15 m、深さは0.5～0.7 m、杭間隔は杭1～杭3が0.5～0.6 mのほぼ等間隔。杭3と杭4は1.0 mと間がやや離れる。井戸SE 1北肩に隣接する杭3からは江戸時代中期に属する道具瓦を底部から検出した。これは根石代わりに転用されたものである。これらは北一門・北二門境界の推定ラインに並ぶ井戸SE 1に伴う江戸時代中期に属する杭跡群と考える。

路面状遺構14（図6、図版2） 調査区の北東部隅で江戸時代中期の整地面下に方形の範囲に22面の東西1.6 m、南北1.4 mの礫敷を検出した。礫敷きの西と南には落ちる肩を

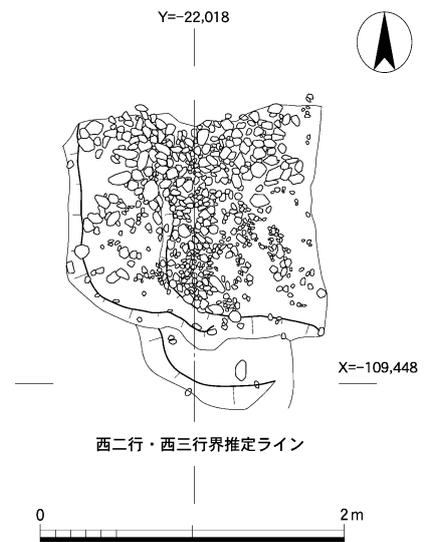


図6 1区路面状遺構14（1：50）

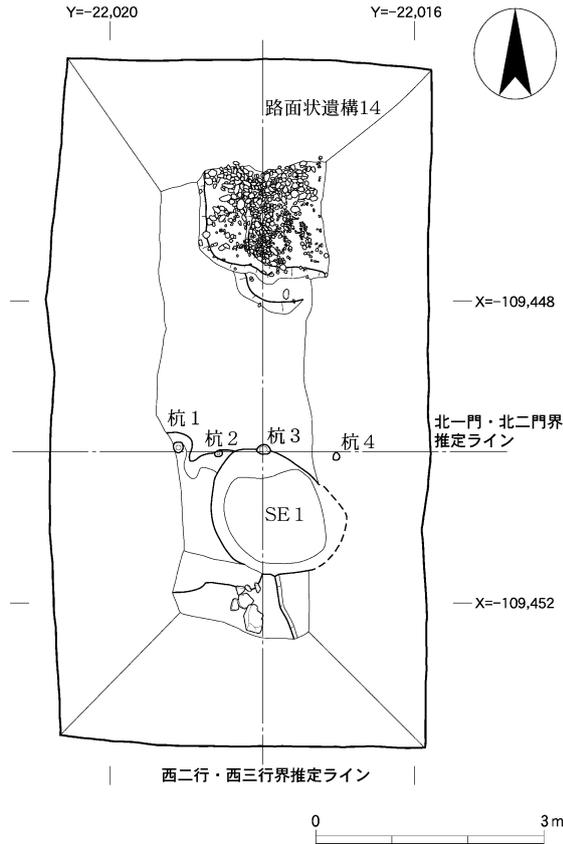


図7 1区第1面平面図(1:100)

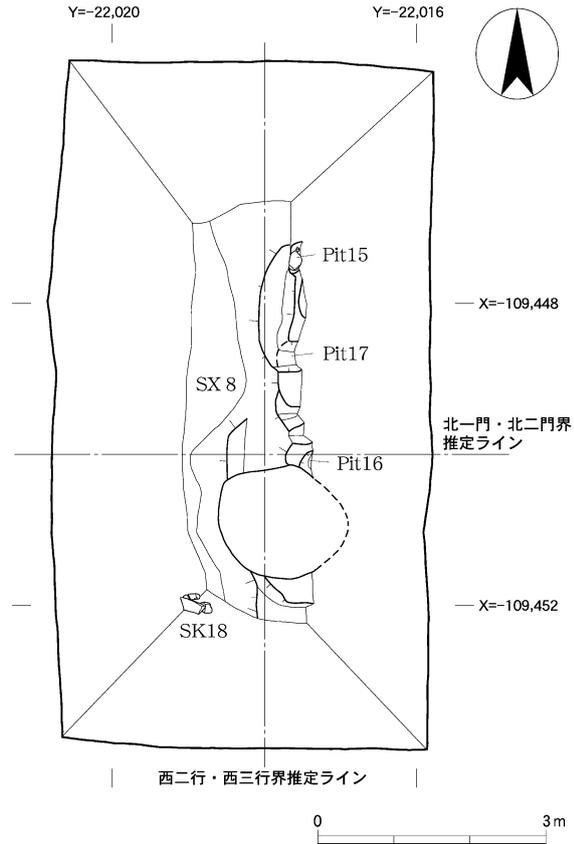


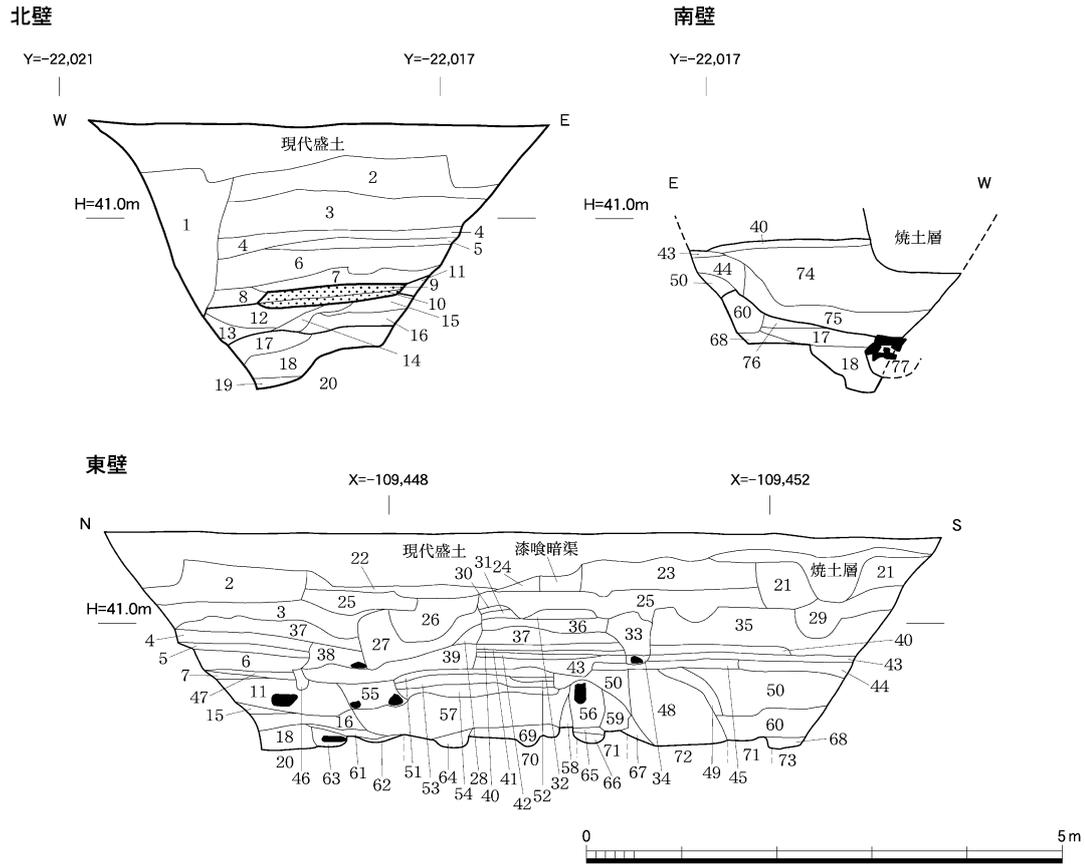
図8 1区第2面平面図(1:100)

有する。粗砂混じりのオリーブ褐色砂泥層に拳大の礫と径3～5cmの礫が不規則に敷かれ、密ではない。下層面も同様に暗オリーブ褐色砂泥層に礫敷面を検出したが、これも密なものではない。この路面状遺構は断面観察から東壁には観られず、北部断面に礫層が見られるため北のみに延ると想定される。なお平面的には捉えられなかったが、東壁断面には南肩先端とほぼ同レベルで上層にタタキ面を有する整地面が3層ある。路面状遺構14とこれらは両替町通の旧路面との見方もできるが、南北の側溝などは検出していないため、宅地内通路、床面などの可能性もある。出土遺物は土師器、国産施釉陶器、輸入陶磁器が少量出土している。江戸時代前期に属する。

(4) 1区第2面の遺構 室町時代・桃山時代から江戸時代初頭(図8、図版1)

第2面は江戸時代前期の路面状遺構14、整地層を掘り下げ後に検出した遺構群である。主な遺構として堀状遺構SX8、土壇SK18、柱穴列Pit15～17がある。柱穴列は黄褐色粘質土地山面で検出し、時期が少し遡るが、2面遺構として概説する。

堀状遺構SX8(図版2)両替町通に平行して調査区を南北に約5.5mわたって縦断する堀状遺構である。路面状遺構14の直下で検出した。両肩は調査区外に延びるため確認はできず、正確な幅は不明であるが、断面から約5mを測るV字状の堀を想定できる。深さは0.8～1.0m。標高は南端部、北端部共に約39.20mである。下部では2段落ちの東肩とその下端を南北に渡り検出した。なお南端部では東に屈曲する肩に分かれる。堀の埋土は北壁断面において上層に強く締ま



- | | |
|---|---|
| <p>1 10YR4/3 暗褐色砂泥 焼け瓦多量に含む廃棄土層</p> <p>2 10YR3/3 暗褐色砂泥 炭、焼土、瓦、土師器片混</p> <p>3 10YR4/2 灰黄褐色泥砂 炭、瓦片少量混</p> <p>4 10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂 炭、焼土少量混 (江戸中期整地層)</p> <p>5 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂礫 1~10cm礫混 (江戸中期整地層)</p> <p>6 10YR3/4 暗褐色砂礫 染付混、1~15cm礫多分に混 (洪水層)</p> <p>7 2.5Y3/1 黒褐色砂泥粘質 炭多量混、土師器片少量混</p> <p>8 2.5Y5/4 黄褐色砂泥 1~3cmの礫混</p> <p>9 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 1~12cm礫多量に混 (路面状遺構14上層)</p> <p>10 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥 炭、土師器少量混、1~10cmの礫中量混 (路面状遺構14下層)</p> <p>11 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥 締まった土層 (江戸前期の路面状整地)</p> <p>12 2.5Y5/3 黄褐色砂泥 小礫混 (SX 8)</p> <p>13 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 炭、焼土少量混 (SX 8)</p> <p>14 2.5Y3/2 黒褐色粘質土 炭、土師器片少量混 (SX 8)</p> <p>15 7.5YR4/6 褐色砂礫 堅く締まる土層、粗砂含む (SX 8)</p> <p>16 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土 炭、土師器片少量混 (SX 8)</p> <p>17 2.5Y3/2 黒褐色粘質土 炭少量混 (SX 8)</p> <p>18 2.5Y3/1 黒褐色粘質土 腐植土、木片混 (SX 8)</p> <p>19 10YR4/2 オリーブ灰色粘土 炭少量混 (SX 8)</p> <p>20 10YR4/6 褐色砂泥 3~4cm礫混 (地山)</p> <p>21 10YR3/4 暗褐色砂泥 炭、焼土、瓦片、漆喰混</p> <p>22 10YR4/6 褐色砂泥固く締まる 炭、焼土混</p> <p>23 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 炭、焼土混</p> <p>24 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 炭、瓦片、漆喰混</p> <p>25 10YR4/4 褐色砂泥 炭、焼土、瓦片混</p> <p>26 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 炭、瓦片、漆喰混、10cm大の礫多量混</p> <p>27 10YR4/4 褐色砂泥 瓦片、5cm大の礫多量混</p> <p>28 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂礫 1~3cmの礫混</p> <p>29 10YR3/4 暗褐色砂泥 炭、焼土混</p> <p>30 10YR5/6 黄褐色砂泥固く締まる 炭少量混</p> <p>31 10YR4/4 褐色砂泥固く締まる</p> <p>32 10YR4/6 褐色砂泥 炭少量混</p> <p>33 10YR4/6 褐色砂泥固く締まる 炭少量混</p> <p>34 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥固く締まる</p> <p>35 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 炭、土師器片少量混</p> <p>36 2.5Y4/6 オリーブ褐色砂泥固く締まる 土師器片少量混</p> <p>37 2.5Y5/3 黄褐色砂泥固く締まる 炭多量混</p> <p>38 2.5Y4/3 オリーブ褐色泥砂 1~18cmの礫中量混</p> <p>39 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂礫 炭少量、染付混、1~3cmの礫混</p> | <p>40 10YR3/4 暗褐色砂礫 炭少量、1~5cmの礫混 (江戸中期の路面状整地)</p> <p>41 10YR3/2 黒褐色砂礫 1~5cmの礫混 (江戸中期の路面状整地)</p> <p>42 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂礫 1~3cmの礫混 (江戸中期の路面状整地)</p> <p>43 7.5YR4/4 褐色砂礫 上部固く締まる 1~15cmの礫混 (江戸中期の路面状整地)</p> <p>44 2.5Y3/2 黒褐色粘質土 炭少量混</p> <p>45 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥固く締まる 炭、2cm大の礫少量混 (江戸中期の路面状整地)</p> <p>46 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂礫 1~3cmの礫混</p> <p>47 7.5YR3/2 黒褐色砂礫固く締まる 炭少量、1~5cmの礫混</p> <p>48 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 炭、1~5cmの礫多量混 (SE 1)</p> <p>49 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥固く締まる 炭少量、1~3cmの礫中量混、別の土壌</p> <p>50 2.5Y3/2 黒褐色砂泥固く締まる 炭混</p> <p>51 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥固く締まる 1~3cmの礫少量混 (江戸前期の路面状整地)</p> <p>52 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂礫 炭少量、1~3cmの礫混 (江戸前期の路面状整地)</p> <p>53 2.5Y3/2 黒褐色砂礫 1~3cmの礫混 (江戸前期の路面状整地)</p> <p>54 10YR4/6 褐色砂礫 炭中量、1~5cmの礫混 (江戸前期の路面状整地)</p> <p>55 7.5YR3/2 黒褐色砂礫固く締まる 炭少量、1~5cmの礫混 (江戸前期の路面状整地)</p> <p>56 7.5Y4/1 灰色粘質土 炭、1~10cmの礫少量混 (SX 8)</p> <p>57 2.5Y3/2 黒褐色粘質土 炭、木片多量混 (SX 8)</p> <p>58 7.5Y4/2 灰オリーブ色粘質土 (SX 8)</p> <p>59 10Y3/1 オリーブ黒色粘質土 炭少量混 (SX 8)</p> <p>60 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 炭多量混 (SX 8)</p> <p>61 2.5Y3/2 黒褐色泥砂 炭多量混 (SX 8)</p> <p>62 2.5Y3/1 黒褐色泥砂 炭多量混 (SX 8)</p> <p>63 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 炭少量混 (Pit15)</p> <p>64 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 炭少量混 (Pit17)</p> <p>65 5Y3/2 オリーブ黒色砂泥固く締まる (Pit16)</p> <p>66 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 炭少量混 (Pit16)</p> <p>67 10YR4/4 褐色砂泥やや粘質 炭多量混</p> <p>68 10Y3/1 オリーブ黒色砂泥粘質</p> <p>69 7.5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 木片多量混 (SX 8)</p> <p>70 7.5Y4/2 灰オリーブ色砂泥 (地山)</p> <p>71 10YR5/6 黄褐色砂泥 (地山)</p> <p>72 7.5YR4/6 褐色砂礫 (地山)</p> <p>73 7.5Y3/2 オリーブ黒色砂泥粘質 (地山)</p> <p>74 7.5YR3/4 暗褐色砂礫 1~10cmの礫混</p> <p>75 7.5YR4/6 褐色砂礫 1~4cmの礫混</p> <p>76 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 炭少量混 (SX 8)</p> <p>77 オリーブ黒色砂泥粘質 5cm大の礫混、上部に同木と長軸30cmの礫載せる (SK18)</p> |
|---|---|

図9 1区北壁・南壁・東壁断面図 (1:80)

る暗灰黄色砂泥層や褐色砂礫層が 30～40 cm 堆積する。これは堀を埋めて路面状遺構 14 のために埋めた整地土層と考える。下層は炭を含んだ黒褐色砂泥粘質土、木製品を含んだ黒褐色腐植土が互層となり、中央部から以南も黒褐色砂泥粘質土、黒褐色腐植土が主体的に堆積する。これらの黒褐色砂泥粘質土は水の存在を窺わせるが、埋土に水の流れを裏付ける砂粒の堆積はなく、また底部の標高差が北端・南端にほとんどない。おそらく水の流れは停滞し澱んでいたものと推定できる。これらのことから導水的な利用としてより、宅地・町割りに対する区画の堀としての性格付けができると思われる。出土遺物は土師器、国産施釉陶器、輸入陶磁器、瓦器、瓦、木製品などで、下層から出土した遺物には、やや古期の様相を持つ土師器もみられたが、大半は桃山時代から江戸時代初頭に属するものである。また遺物からは路面状遺構 14 との時期差もほとんど認められず、おそらくこの堀は短期間に一気に埋められ、直後に路面状遺構 14 が成立したものと思われる。

土壙 SK18 調査区南壁、堀の南西隅で胴木を東西に据えた上に小振りな石を載せ、その上に長軸 30 cm 以上、短軸 20 cm 以上の方形状の石を据えた土壙を断面に検出した。堀の南に延びる肩と東に屈曲する肩の真西に当たり、堀に伴う施設遺構と考えられるが、調査区の限界から断面確認しかできず、正確な遺構の位置づけはできない。

柱穴 Pit15～17 これらの Pit は堀状遺構の 2 段落ちになる肩部に位置し、西壁際で北部から中央部にかけて南北に 2 間分にわたって検出した。東半部は調査区外になるため全体像はつかめていない。柱間は約 1.3 m の等間隔であるが、Pit16 は東にずれ不揃いである。Pit15 は形態が円形状を呈し、南北約 0.5 m、長軸 0.2 m の平坦な自然石を据える。深さは 0.2 m。Pit17 は西部が削られはつきりしないが、円形状を呈したものと推定する。南北約 0.5 m、深さは 0.1 m。Pit16 は同じく円形状で、南北約 0.4 m、深さ 0.16 m。Pit15 以外の Pit には根石の痕跡は見られない。出土遺物は Pit15 から室町時代後期の土師器小片を採取しており、この柱穴群が室町時代後期に遡る堀に付随する遺構の可能性もあるが今のところは即断できない。

(5) 2 区第 1 面の遺構 江戸時代前期から中期 (図 21、図版 2)

2 区は西部で検出した火災整理土層下、桃山時代から江戸時代初頭にあたる暗灰色砂泥面を第 1 面とし、その面に掘削レベルを合わせ、東部の江戸時代中期・後期の整地面を掘削することから始めた。層序が複雑で、必ずしも同時期の遺構を捉えられたわけではなく、江戸時代前期以降・中期の遺構群も調査対象に含まれている。主な遺構には石室基底部 SX 1、土壙 SK93、土壙 SK92、土壙 SK51、土壙 SK48、溝 SD50、建物礎石列 SB001、建物柱穴列 SB002、土壙 SK19 がある。以下この面で検出した遺構について概説する。

井戸 SE21 調査区の西部中央で検出した井戸。掘形平面は東西 1.2 m、南北 1.3 m の円形。深さは 0.2 m 以上を測る。埋土は暗灰色泥土が堆積する。井戸側の構造物などは検出できなかったが、漆喰片が多く混入することから、漆喰塗りの井戸の可能性が高い。出土遺物は国産施釉陶器、漆喰、焼締陶器など。江戸時代中期に属する。

石室 SX 1 (図 10) 東西方向の石室基底部である。最下層部の石組 1 段と礫敷と床面を検出したが、掘形は認めていない。形態は方形、規模は内法が東西約 2.2 m 以上、南北約 0.8 m。深さは約 0.4 m。東端部には長軸 0.3 ~ 0.5 m、短軸 0.2 ~ 0.25 m の自然石が小口を内にコの字状に 4 基残存する。床面は平坦で拳大と小ぶりの礫が貼られるが密ではない。床面下には基礎固めの整地が施される。出土遺物は土師器、施釉陶器、瓦などが少量ある。江戸時代前期以降に属する遺構と考える。石室南東部と西端部では石の抜き取りと考えられる SK93・SK92 を検出した。形態は南東方向に楕円形を呈し、石の抜かれた方向を示す。規模は SK93 が長軸 1.0 m、SK92 が約 0.6 m。深さは 0.05 ~ 0.1 m。出土遺物は輸入白磁が SK93 から出土している。

また、SX 1 の湿気抜きの土壌と考えられる SK51・SK48 を検出した。

SK51 は、石室基底部 SX 1 の石組東端部で、拳大の礫が集中する下層に検出した。形態は方形を呈し、規模は東西約 1.0 m、南北約 0.6 m。深さは 0.2 m を測る。灰黄褐色泥砂の埋土に拳大の礫と小礫、瓦を多分に包含する。出土遺物は瓦に限られ、古期の瓦が混入する。SK48 は、石室基底部 SX 1 の西部で石敷の下層で検出した。形態は方形を呈し、規模は東西約 1.0 m、南北約 0.6 m。深さは約 0.25 m を測る。灰黄褐色泥砂の埋土に拳大の礫と小礫を多分に包含する。

溝 SD50 調査区東部で検出した東西方向の溝である。西端は土壌 SK51 に至り、東部は調査区外に延びる。東西 2.8 m、幅約 0.4 m、深さは浅く 0.1 m 前後。東にわずかに傾斜していく。石室基底部 SX 1、土壌 SK51 と付随する遺構の可能性はある。

建物礎石列 SB001 (図 11) 調査区の南部において検出した南北方向の礎石列である。礎石列は北に対して東に約 3° 振る。掘形は検出してない。東西 2 間の約 4.2 m (14 尺)、南北 1 間の約 2.0 m (6.6 尺) の規模を持つ。柱間は東西が 2.0 ~ 2.1 m (6.6 ~ 7 尺)、なお北列の中央部の Pit24 は石の抜き取り穴、南列の南西隅は攪乱を受け検出できなかった。石 1 は試掘坑の南東隅に位

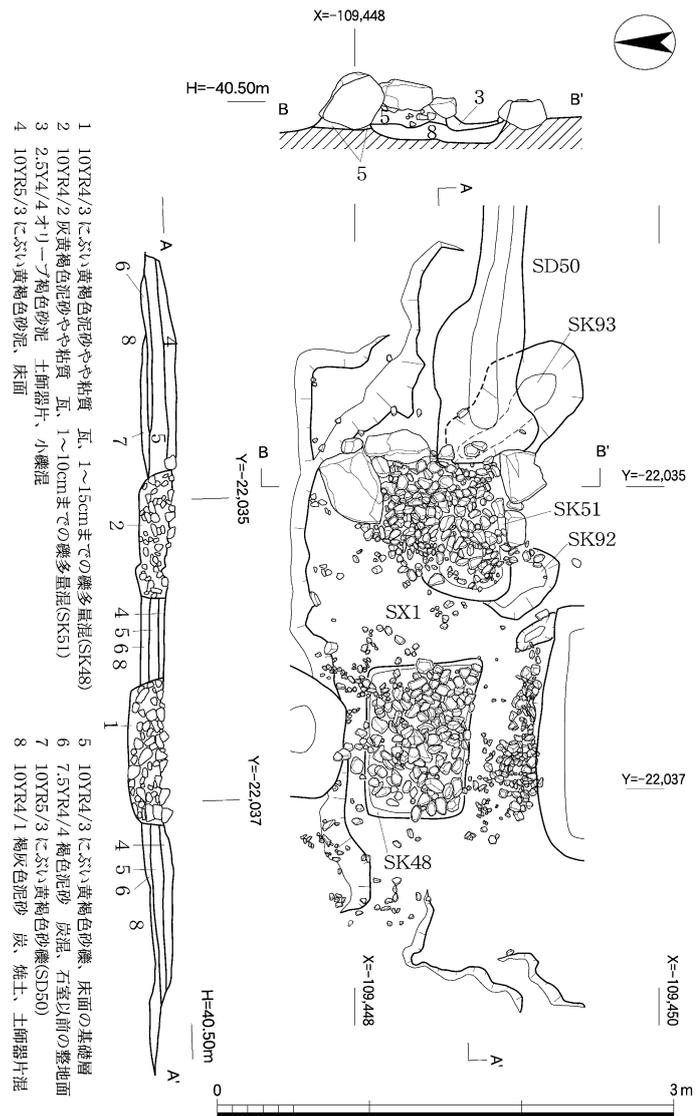


図 10 2区石室 SX 1 実測図 (1 : 50)

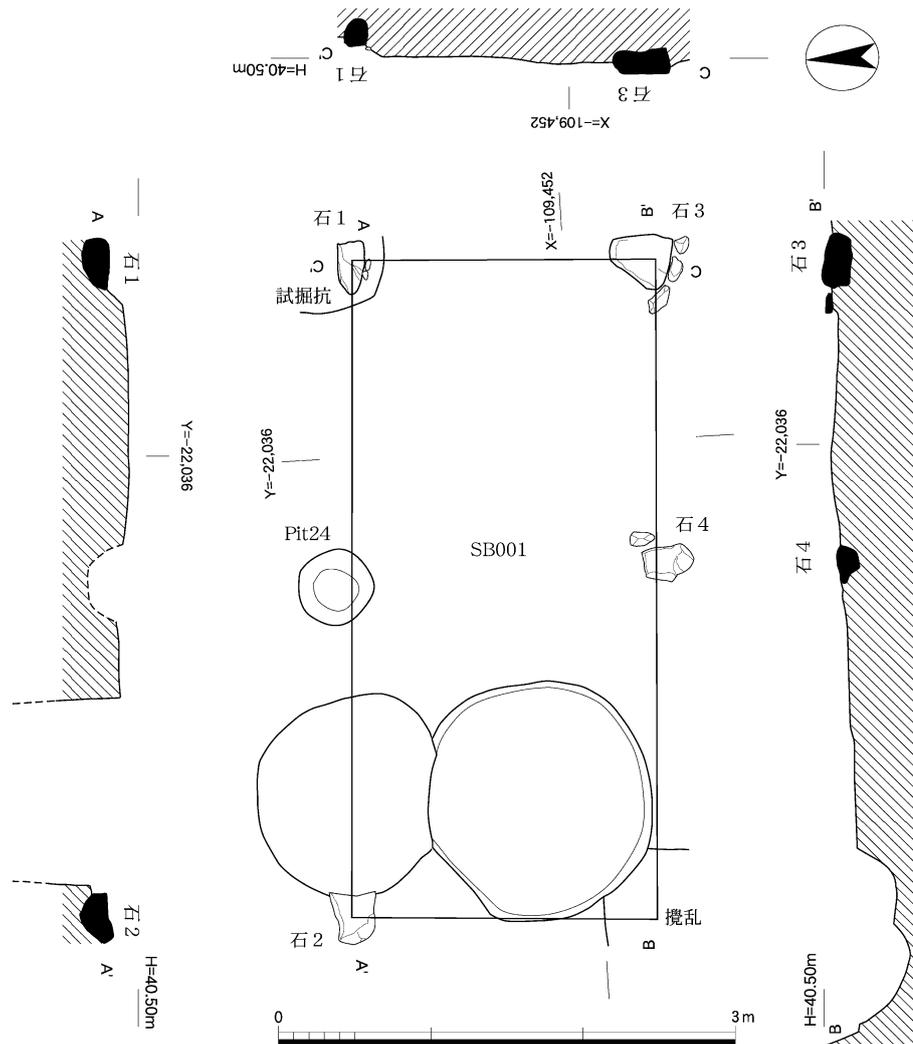


図 11 2区建物礎石列 SB001 実測図 (1 : 50)

置し、石の規模は長軸約 0.3 m、厚さ約 0.15 m、上端部は平坦である。石 2 は西部の近代井戸西に位置する。長軸約 0.3 m、厚さ約 0.15 m、上端部は平坦である。石 3 は南東隅の石で長軸約 0.4 m、厚さ約 0.15 m、南端部周縁に小ぶりの石が取り囲む。石列の標高を比較すれば南列の石列が約 0.2 m 程高く不揃いである。各石列には据え付け穴の痕跡は検出しておらず、地表面に石の形状に合わせて掘り、据え置いたと考える。これらの石列の規模からは、ある程度の大きさの建物の構造物を推定できるが、明確なことは不明である。石室と供伴する江戸時代前期以降の建物関連遺構の可能性を考えられる。

建物柱穴列 SB002 (図 12) 調査区の北西部で検出した南北に 4 間並ぶ柱穴列である。柱穴の形態は円形を呈し、規模は径約 0.5 ~ 0.6 m、深さは約 0.1 ~ 0.2 m。暗灰色砂泥の埋土に 5 ~ 10 cm の礫を多分に含むものもあり、根固めを施した様相が見られる。礎石を有するものとする。柱間は南端と北端の 1 間分が約 1.0 m (3.3 尺) で等間隔。中央 2 間分は 1.2 m (4 尺) の等間隔。南部には延長が見られない。おそらく北には延びず南と北に底をもつ建物が西に展開するものと推定できる。出土遺物は少量である。江戸時代前期以降に属する。

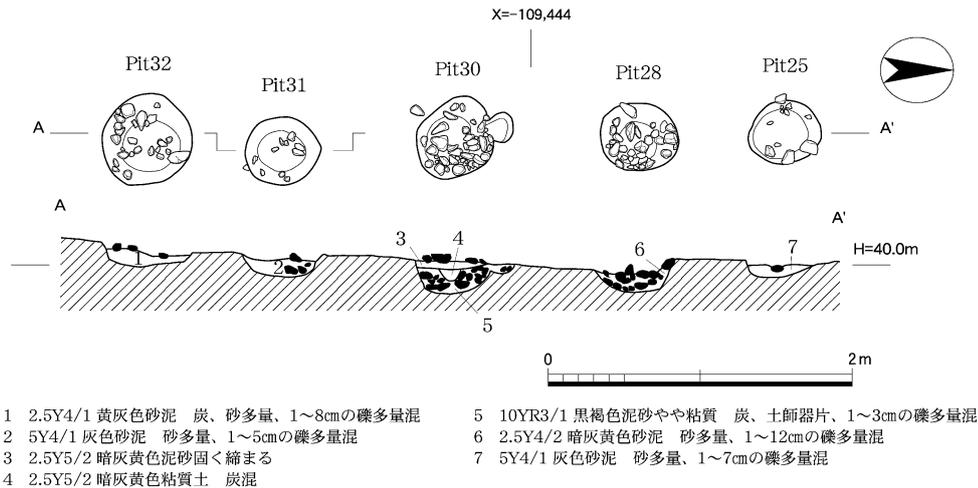


図 12 2区建物柱穴列 SB002 実測図 (1:50)

土壌 SK19 調査区の西端南部で検出した。暗灰黄色砂泥の埋土に径 20 cm の礫を多分に包含する。西部が調査区外に当たるため全体像は確認できないが、形態はおそらく円形を呈するものであろう。規模は東西 0.5 m、南北 1.1 m。円形の石室と考えられる遺構である。出土遺物は桃山時代から江戸時代初頭に属する土師器などがあるが、下層の混入品と考え、江戸時代前期以降の遺構に属する。

土壌 SK27 調査区の北西隅で検出した。西部は調査区外に広がる。南北 1.4 m、深さは約 0.25 m。炭を多分に含む暗褐色砂泥の埋土から、江戸時代前期の土師器が出土した。江戸時代前期に属する。

土壌 SK22 石室基底部 SX 1 床面掘り下げ後、その南で検出した。形態は方形。東西 1.7 m、南北 0.8 m。深さ 0.25 m。出土遺物は施釉陶器、焼締陶器、輸入陶器がある。江戸時代前期に属する。

(6) 2区第2面の遺構 桃山時代から江戸時代初頭 (図 22、図版 3)

第2面は桃山時代から江戸時代初頭にあたる遺構群である。調査区東部に高まりを残し、西部は土取穴、廃棄土壌などにより削平されて低くなり、南東部に Pit 群が集中する傾向が確認できた。主な遺構には井戸 SE 2、廃棄土壌 SX10、土取穴 SX82、柵 003A・B、土壌 SK131 などである。以下この面で検出した遺構について概説する。

井戸 SE 2 (図 13、図版 4) 調査区南西隅で検出した井戸である。掘形平面形は、径約 1.4 m の円形を呈し、底面から 1.3 m 上部の間に桶の痕跡を 2 段検出した。桶の内径は約 0.9 m。桶と接する掘形部には丹念に 2~4 cm の小礫を貼り込み、叩き締め、桶を保護した様相が見られる。またその掘形には桶の組み合わせによる段差が 1 段、桶のタガ跡痕跡が 3 段残存する。一部に桶の部材が薄く残る部分もあったが、腐食が激しいことから採取には至らなかった。底部の標高は約 37.6 m。出土遺物は土師器、瓦器、施釉陶器などがある。桃山時代から江戸時代初頭に属する。

廃棄土壌 SX10 (図 14) 調査区の北西隅で検出した。遺構は調査区外の東部にも広がりを持ち、西部は下層で西に広がる。形態は不整形な方形状である。検出規模は東西は約 4.5 m、南北 4.0 m。

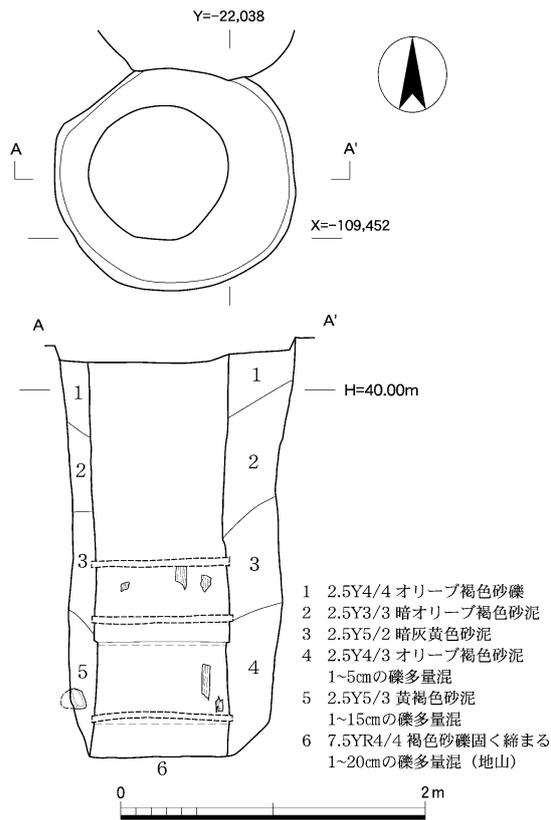


図 13 2区井戸 SE 2 実測図 (1 : 50)

埋土は炭、灰を多分に含む暗灰色・黒褐色粘質土などが主体となる。西端には杭跡(Pit98・92・93・97・94・96・99)が南北に残存する。しかし西肩は一時的に造られたもので、古期には西肩下層の堆積から調査区外西に広がる様相があることを確認した。この遺構は黒色粘質土系の堆積状況から、水・汚泥が常時溜まった、廃棄処理の土壌であったことが推定できる。またこの周辺には地山に暗オリーブ色砂泥が堆積するなど、廃棄土壌として利用する以前からも湿地状態であったことも推定できる。これらのことから南に隣接する土地は土取として利用できたが、この一帯は土取としては不適切であったと思われる。出土遺物は土師器、国産施釉陶器、輸入陶磁器、瓦器、木製品(漆製品)、鑄造関連の土製品、食物残滓、魚の骨、鳥の骨など多種・多様である。

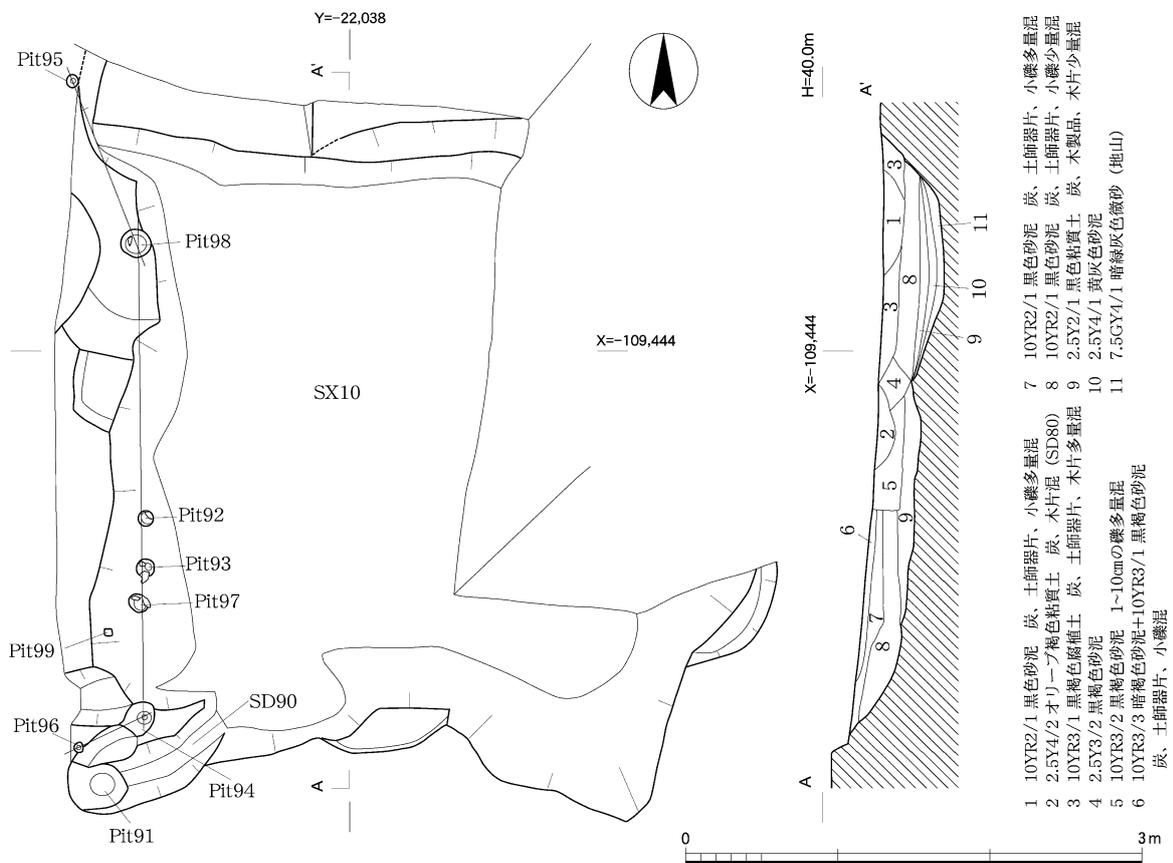


図 14 2区廃棄土壌 SX10 実測図 (1 : 50)

出土遺物は桃山時代から江戸時代初頭に属する。

溝 SD90 廃棄土壙 SX10 の南西角に位置し、SX10 に繋がる溝状遺構である。東に下がる傾斜を持つことから SX10 に排水を流す溝とも考えられる。溝の調査区壁際西端に、円形で径約 0.3 ～ 0.4 m、深さが約 0.6 m の Pit91 を伴う。水止めの杭跡などが考えられる。SX10 と同一時期に属すると考える。

土壙 SX82 調査区西部中央で検出した。廃棄土壙 SX10 の南に隣接する。平面形は不整形な方形状を呈する。規模は東西約 4 m、南北約 4 m。深さは 0.3 ～ 0.4 m。埋土は炭を含んだ暗灰黄色砂泥が全体に堆積する。下層に明褐色砂泥の堆積が見られ、土取穴として掘削した後に、廃棄物処理に利用されている。出土遺物は土師器、施釉陶器、輸入陶磁器、焼締陶器、瓦器、須恵器、木製品、漆器、基石、砥石、釘、鑄造関連の土製品、食物残滓などがある。桃山時代から江戸時代初頭に属する。

柵 SA003A・B (図 15、図版 4) 調査区の南東部で、0.5 ～ 1.0 cm の小礫を貼り込んだ整地面を検出した。方形状に東西約 3.4 m、南北約 2.2 m。上層は褐色粘質土の上に礫を貼り込まれ、下層は鈍い黄褐色粘質土を叩き締めた整地基礎である。その整地面で Pit 群を検出した。その内の多くは東西方向 2 列の柵列としてまとめ、いずれも約 4 m 続く。根石を有するものと無いものがある。柱間は約 1.4 ～ 2.0 m (4.6 ～ 6.3 尺) と変則的で、北列は Pit43・73・88 が南列 Pit77・89・86 と対応する。両ライン間隔は 0.9 m。Pit 平面形は円形と楕円形があり、根石を有するものは横長楕円形。規模は約 0.2 ～ 0.3 m、深さは 0.03 ～ 0.1 m と全て浅い。西端の北列には小ぶりの円形の径 0.1 m、深さ約 0.1 m の Pit107 が並ぶ。南列にも同じ形態の Pit106 が南列に位置するが、並びから北に約 0.2 m 外れる。これらの Pit 列は整地面に伴う柵列群と考える。他にも北列ラインに沿う Pit があるが正確に捉えきれない。また柵は 1 面の礎石列と同じく北に対し東に約 3° 傾く傾向を有するものである。出土遺物には Pit や整地面から出土した土師器などがあるが少量である。桃

山時代から江戸時代初頭に属する。

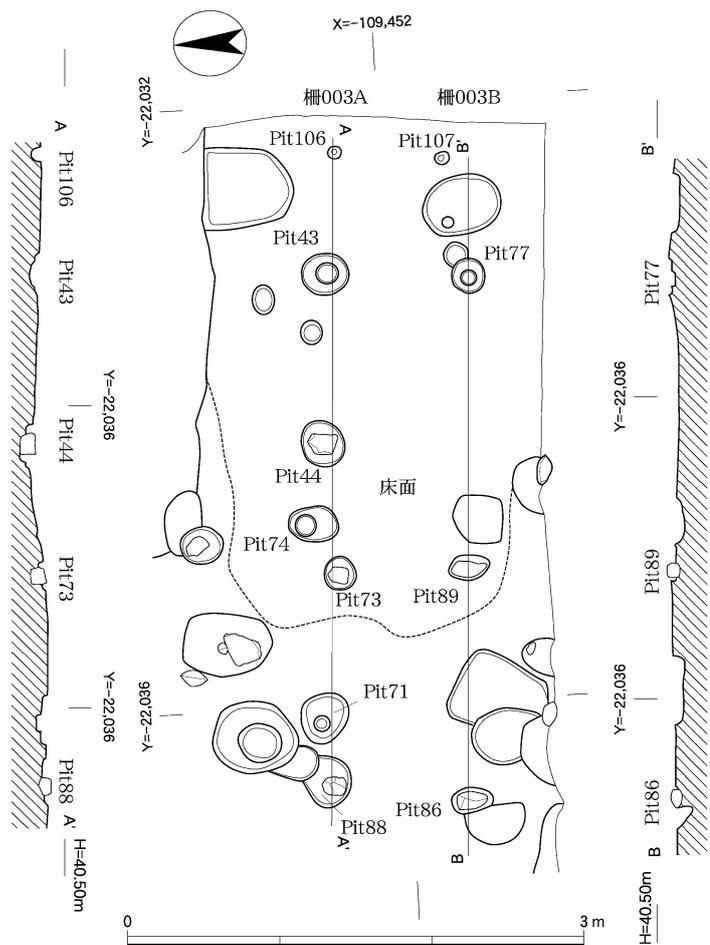


図 15 2区柵 SA003A・B 実測図 (1:50)

山時代から江戸時代初頭に属する。

土壌 SK131 調査区南西隅で検出した円形状の土壌。南部・西部共に調査区外に広がる。埋土は上層に経約 0.1～0.2 m の自然石を含む暗灰黄色砂泥が堆積し、下層に炭を含む黒褐色砂泥粘質土が堆積する。北肩は内にえぐれ気味に落ち込む土取穴である。出土遺物は土師器、輸入陶磁器、国産施釉陶磁器、焼締陶器などである。桃山時代から江戸時代初頭に属する。

土壌 SK101 調査区の北東隅で検出した。形態は北部・東部が調査区外に広がるため不明である。規模は東西 1.8 m 以上、南北 0.6 m 以上、深さ 0.15～0.2 m。出土遺物は土師器、輸入陶磁器、焼締陶器がある。桃山時代から江戸時代初頭に属する。

(7) 2区第3面の遺構 平安時代・室町時代後期から桃山時代 (図 23、図版 3)

第3面の遺構群は主に地山の黄褐色粘質土面で検出した遺構群が主体となる。遺構は中央部から南西部にかけて土取穴に削平されるが、東部は北一門・北二門境界推定ラインから以北、約 4 m 間に展開している。主な遺構には東西柵 SA004、根石や柱穴を有する Pit12・196・130 があり、室町時代後期の遺構である。SK136・SK 4 は2面の古期に相当する遺構である。そして同じく同一面で検出した遺構には、平安時代前期の Pit128 などがある。以下この面で検出した室町時代後期から桃山時代・平安時代前期の遺構について概説する。

柵 SA004 (図 16、図版 4) 調査区中央のやや南寄り、黄褐色砂泥地山で検出した東西方向の柱穴 Pit 列である。この Pit 列はほぼ北一門・北二門境界推定ライン上に並び、4 間分 8.5 m を検出した。柱間は Pit149 と Pit139 が 1.4 m (4.6 尺)。Pit189 から Pit149 の 2 間分は約 1.2 m (4 尺) の等間隔である。Pit139 と Pit171 間の Pit は土取穴に削平されたのか、検出しておらず不明である。Pit の形態は円形、規模は約 0.3～0.4 m、深さは 0.2～0.5 m。Pit からは時期の確定できる遺物は小片で少量であったが、Pit139・149 から室町時代後期の土師器が出土している。

土壌 SK136 調査区中央部から南に位置する不整形な土壌である。規模は東西約 6.0 m、南北約 3.0 m。SX82 よりさらに東へ広がる肩部を有し、南部は調査区以南にも広がる。土取穴と考える。出土遺物は土師器、国産施釉陶器、瓦器、輸入陶磁器、金属製品、瓦などが出土している。桃山時代に属する。

土壌 SK 4 調査区の南東部、柵 SA003A・B の直下で検出した。形態は不整形な方形。規模は東西約 2.2 m、南北約 3.2 m、深さは約 0.4～0.6 m。埋土は炭を含んだ灰黄褐色砂泥が主体となり堆積する。底部には褐色砂泥粘質土の堆積が見られ、土壌状や溝状の土取による掘削痕跡が残存する。おそらく土取が行われた後に埋められ、柵 SA004 を作る時期に整地されたと考える。出土遺物は土師器、国産施釉陶器、輸入陶磁器、焼締陶器などがあり、桃山時代に属する。

柱穴 Pit12 (図 17) 柵 SA004 ライン南に約 0.2 m ずれて位置する。形態は楕円形、規模は径約 0.3～0.35 m。方形の長軸 0.1 m の平坦な石を中央にすえる。

柱穴 Pit196 (図 18) 柵 SA004 ライン南に約 0.2 m ずれて位置する。形態は円形、規模は径約 0.3 m。西部は土壌 SK136 に削平を受けている。柱穴内に平坦な径 0.15 m の石が据えられる。

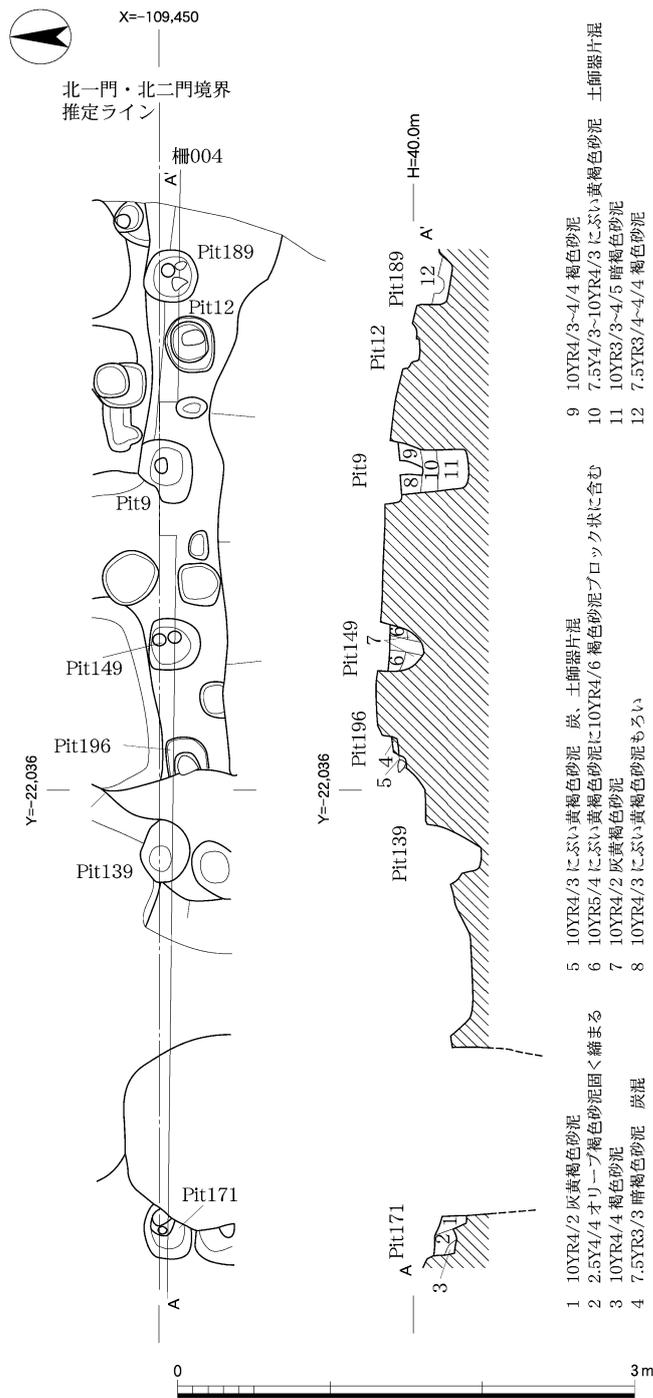


図16 2区柵 SA004 実測図 (1:50)

柱穴 Pit130 (図19) 調査区の南西部、黄褐色砂泥地
山で検出した。東部は近代井戸により削平を受けている。
形態は円形、規模は径約0.3m、深さ約0.2m。柱痕跡
が残存する。出土遺物は土師器があり、室町時代後期に
属する。

柱穴 Pit128 (図20) 唯一平安時代の遺構とする可能性
のある遺構である。調査区の南西隅に位置し、黄褐色砂

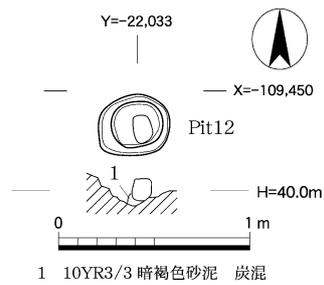


図17 2区柱穴 Pit12 実測図 (1:40)

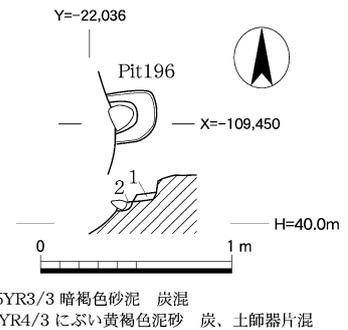


図18 2区柱穴 Pit196 実測図 (1:40)

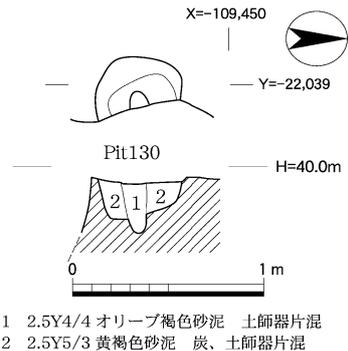


図19 2区柱穴 Pit130 実測図 (1:40)

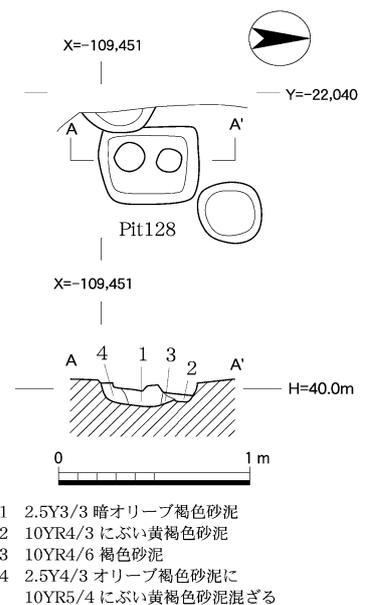


図20 2区柱穴 Pit128 実測図 (1:40)

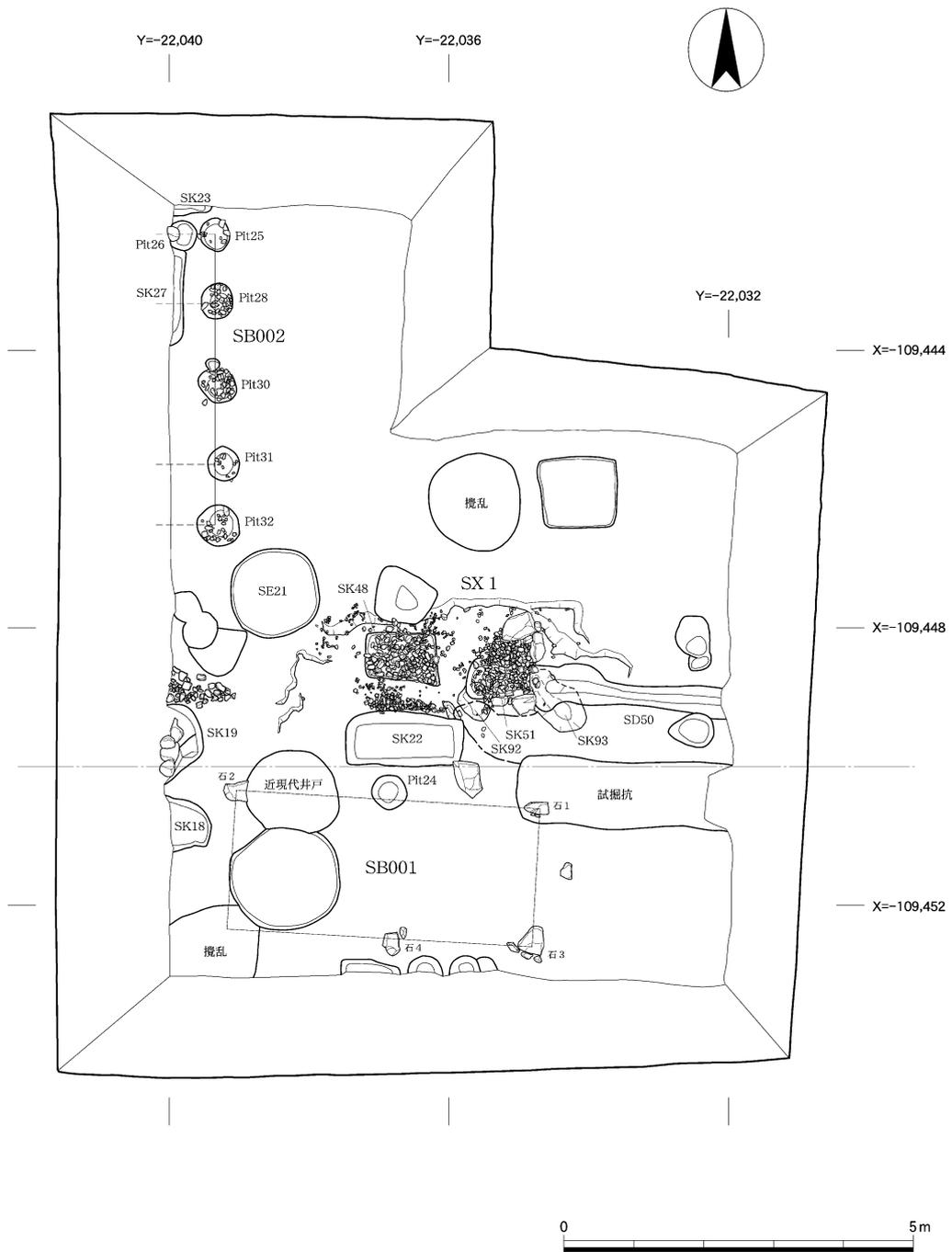


図 21 2区第1面平面図 (1:100)

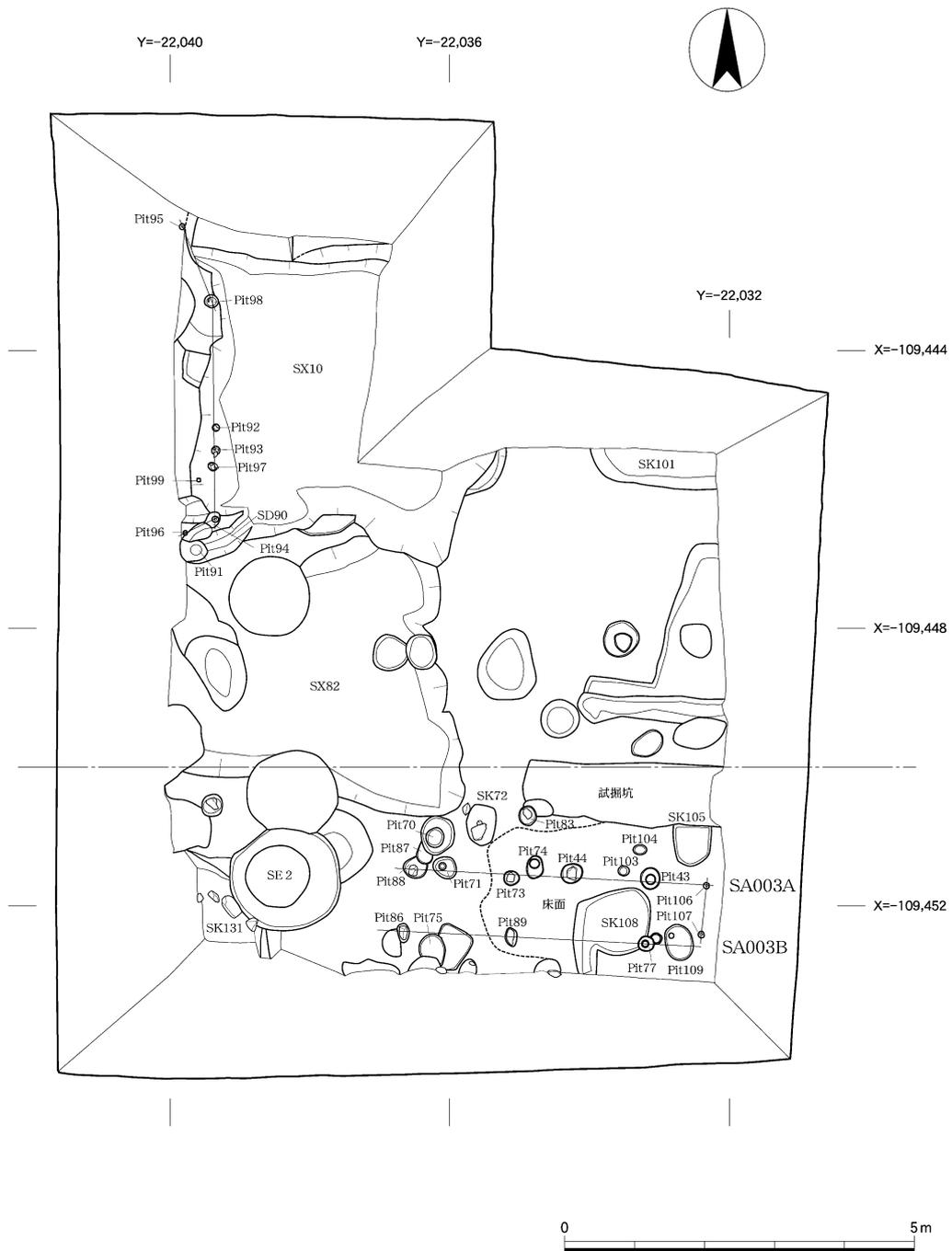


图 22 2区第2面平面图 (1:100)

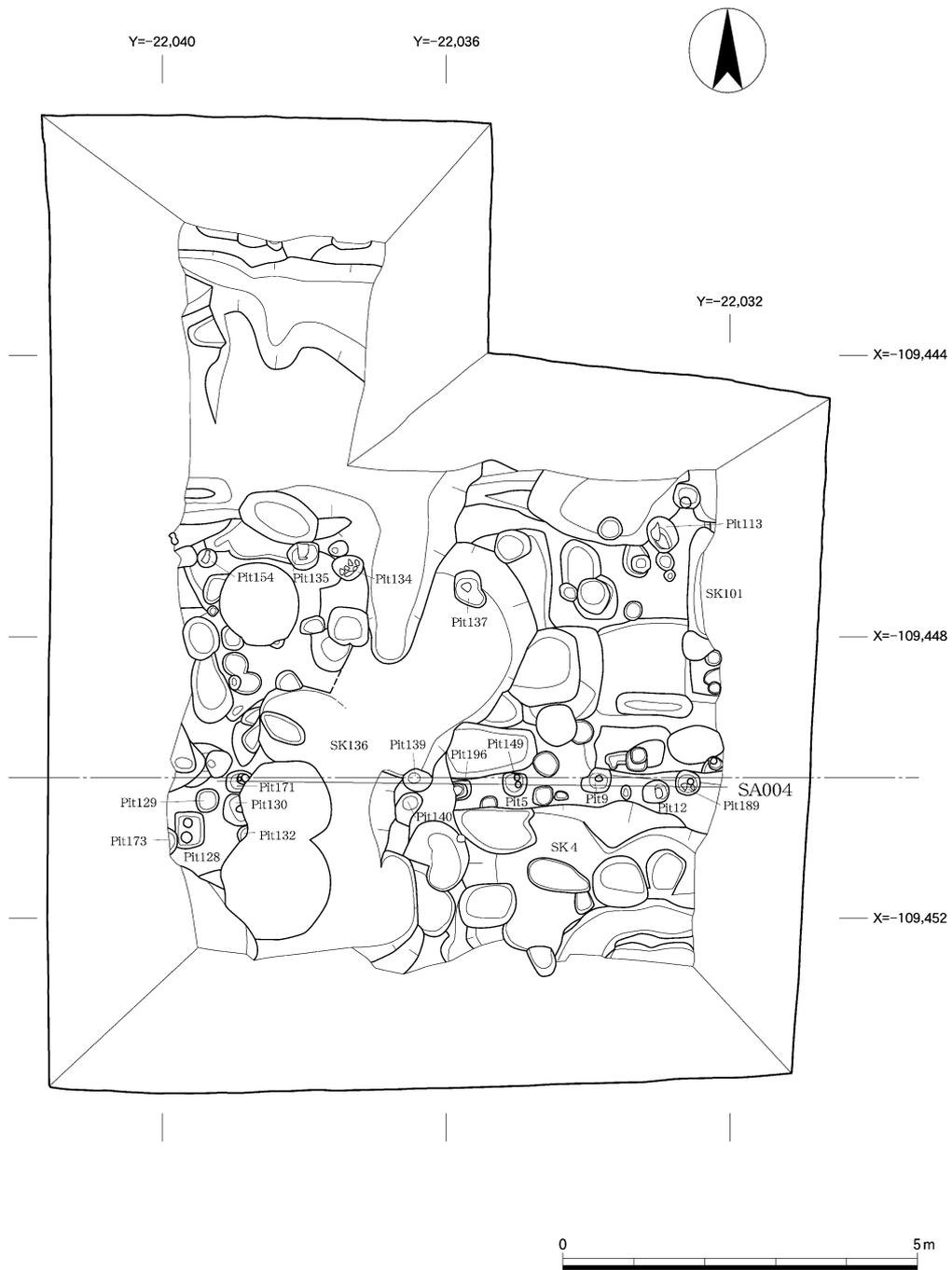
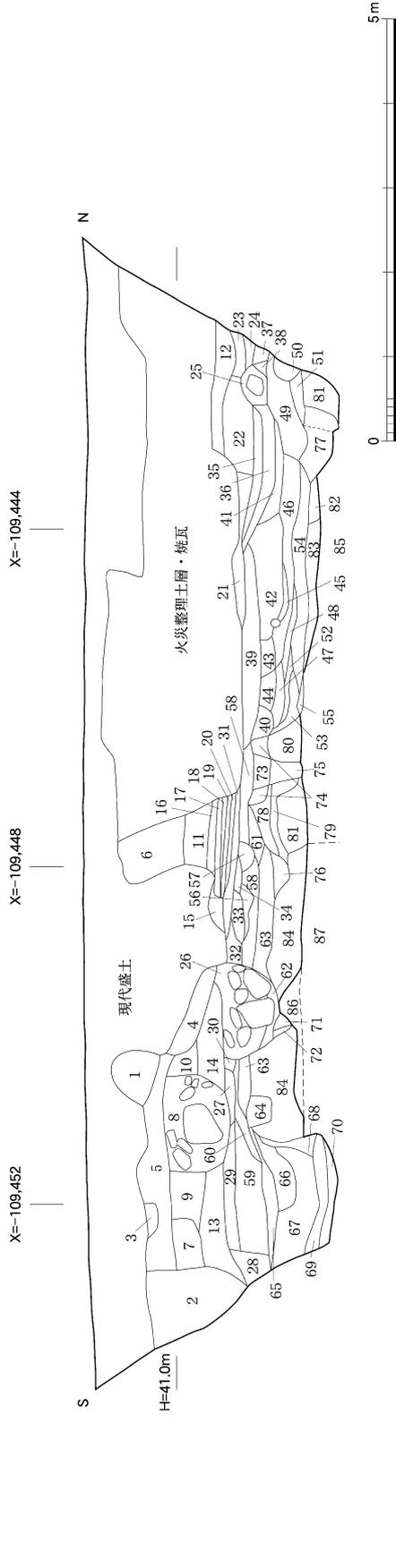
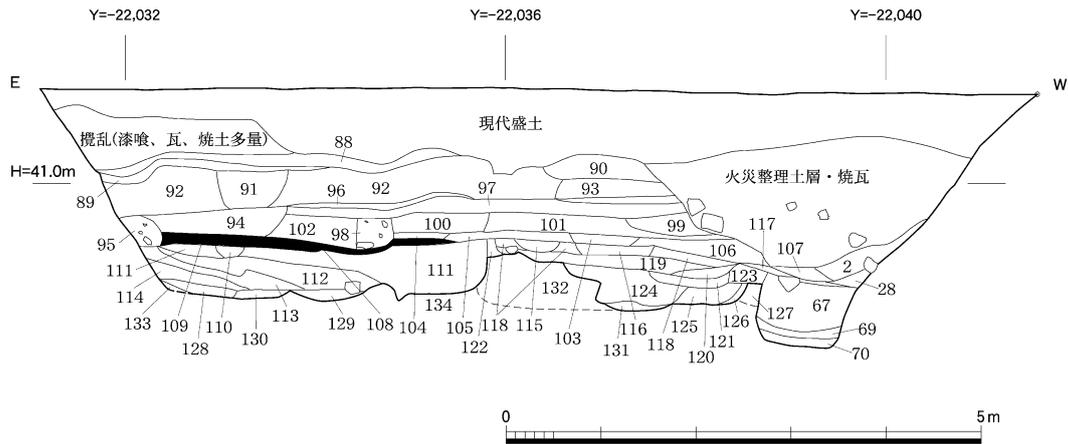


图 23 2区第3面平面图 (1:100)



- | | | | | | |
|----|-------------------|----------------------------------|----|---------------------|--|
| 1 | 10YR3/4 暗褐色砂泥 | 炭、焼土、漆喰混 | 30 | 10YR4/4 褐色砂泥 | 炭、瓦片、土師器片混 |
| 2 | 10YR3/3 暗褐色砂泥 | 炭、焼土、瓦、土師器片、漆喰混 | 31 | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 | 固くしまる 炭、土師器片混、3cmまでの礫少量混 |
| 3 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 | 瓦、焼土混 | 32 | 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 | 炭、焼土、土師器片混、5~10cmの礫混 |
| 4 | 10YR3/4 暗褐色砂泥 | 炭、焼土、土師器片、漆喰、貝混 | 33 | 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥 | 炭、焼土、土師器片混、5~10cmの礫混 |
| 5 | 10YR4/6 褐色砂泥 | 炭、焼土、瓦、土師器片混 | 34 | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 | 炭混、1~3cmの礫少量混 |
| 6 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 | 炭、焼土、瓦片、漆喰混、1~10cmの礫少量混 | 35 | 10YR4/2 暗灰黄色砂泥 | 炭、焼土、土師器片混 |
| 7 | 5Y3/2 オリーブ黒色砂泥 | 炭、焼土、土師器片混 | 36 | 7.5Y2/1 黒色粘質土+炭層 | 木片、土師器片混 |
| 8 | 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 | 土師器片混、50cmまでの礫少量混 | 37 | 2.5Y2/1 黒色粘質土+炭層 | 土師器片混 (Pl23) |
| 9 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 | 炭、焼土、瓦、土師器片混、1~3cm礫少量混 | 38 | 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土 | 炭、焼土混 |
| 10 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 | 炭、焼土混 | 39 | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 | 炭、焼土、瓦、土師器片混、1~10cmの礫少量混 (SX10、最上層一回みに入り込んだ土か) |
| 11 | 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 | 炭、焼土、土師器片混 | 40 | 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土 | 炭、焼土混 (SX10、西層) |
| 12 | 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥 | 炭、瓦片、焼土、漆喰混、1~3cmの礫少量混 | 41 | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥粘質土 | 炭、土師器片混 (SX10) |
| 13 | 10YR3/4 暗褐色砂泥 | 10YR6/8 明黄褐色砂泥ブロック状混 | 42 | 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土 | 炭、焼土、土師器片混 (SX10、西層) |
| 14 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 | 炭、焼土混、3cmまでの礫少量混 | 43 | 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 | (SX10、西層) |
| 15 | 10YR3/4 暗褐色砂泥 | 炭、焼土、土師器片、漆喰混 | 44 | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥粘質土 | 炭、焼土混 (SX10、西層) |
| 16 | 7.5Y3/2 黒褐色砂泥 | 炭、焼土混、粗砂、1~3cmの礫少量混 (江戸前期以降の整地面) | 45 | 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 | 炭、焼土、木片混 (SX10) |
| 17 | 10YR4/4 褐色砂泥粘質土 | 炭、土師器片混 (江戸前期以降の整地面) | 46 | 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 | 炭、焼土、土師器片混 (SX10) |
| 18 | 2.5Y4/1 黄灰色砂泥 | 炭、土師器片混 (江戸前期以降の整地面) | 47 | 5Y3/2 オリーブ黒色粘質土 | 炭、焼土、土師器片混 (SX10) |
| 19 | 10YR4/4 褐色砂泥 | (江戸前期以降の整地面) | 48 | 5Y2/2 オリーブ黒色粘質土 | 炭、土師器片混 (SX10) |
| 20 | 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 | 3cmまでの礫少量混 (江戸前期以降の整地面) | 49 | 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土 | 炭、土師器片混、1~5cmの礫少量混 (SX10、西層) |
| 21 | 10YR3/3 暗褐色砂泥 | 炭、焼土混、1~10cmの礫少量混 | 50 | 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土 | 炭、土師器片混 (SX10) |
| 22 | 10YR3/4 暗褐色砂泥 | 炭、焼土混 | 51 | 5Y4/1 灰色粘質土 | 炭、焼土、土師器片混 (SX10) |
| 23 | 7.5Y3/3 暗褐色砂泥 | 3cmまでの礫混 | 52 | 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 | 炭、焼土混 (SX10) |
| 24 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 | 1~10cmの礫少量混 | 53 | 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土 | 炭、焼土混 (SX10) |
| 25 | 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 | 炭、土師器片混、20cmの石混 (Pl26) | 54 | 10Y3/1 オリーブ黒色粘質土 | 炭、木片混、1~20cmの礫少量混 (SX10) |
| 26 | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 | 炭、焼土混、40cmまでの礫少量混 (SK19) | 55 | 10Y4/1 灰色粘質土 | 土師器片混 (SX10) |
| 27 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 | 炭、焼土混、3cmまでの礫少量混 | 56 | 10YR4/2 暗灰黄色砂泥 | 炭、焼土、土師器片混、1~3cmの礫少量混 |
| 28 | 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥 | 炭、焼土、土師器片混 | 57 | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 | 炭、焼土、土師器片混、1~5cmの礫少量混 |
| 29 | 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 | 炭、焼土、土師器片混 | 58 | 10YR4/2 暗灰黄色砂泥 | 炭、焼土、土師器片混、1~10cmの礫少量混 |
| | | | 59 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 | 炭、焼土、土師器片混、3cmまでの礫少量混 |
| | | | 60 | 10YR2/2 黒褐色炭層 | 土師器片混 |
| | | | 61 | 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 | 炭、土師器片混 (SX82) |
| | | | 62 | 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 | 炭、土師器片混 (SX82) |
| | | | 63 | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 | 炭、土師器片混 (SX82) |
| | | | 64 | 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥 | 炭、焼土、土師器片混 |
| | | | 65 | 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 | 炭、土師器片混 (SK131) |
| | | | 66 | 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 | 炭混、1~10cmの礫少量混 (SK131) |
| | | | 67 | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 | 炭、焼土、瓦、土師器片混 |
| | | | 68 | 2.5Y5/4 黄褐色粘質土 | 炭、土師器片混 (SK131) |
| | | | 69 | 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 | 炭、土師器片混 (SK131) |
| | | | 70 | 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土 | 炭混 (SK131) |
| | | | 71 | 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土 | 土師器片混 |
| | | | 72 | 10YR4/6 褐色粘質土 | 炭、土師器片混 |
| | | | 73 | 5Y3/2 オリーブ黒色粘質土 | 炭、焼土、土師器片混 |
| | | | 74 | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥粘質土 | 炭、土師器片混、1~4cmの礫少量混 |
| | | | 75 | 5Y4/1 灰色粘質土 | 炭、土師器片混 |
| | | | 76 | 5Y4/1 灰色砂泥 | 炭混 (Pl155) |
| | | | 77 | 10Y4/1 灰色粘質土 | 炭、焼土混 (SK152-SX10下層) |
| | | | 78 | 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土 | 炭、焼土、土師器片混 |
| | | | 79 | 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土 | 炭、焼土、土師器片混 |
| | | | 80 | 10YR5/8 黄褐色粘質土 | |
| | | | 81 | 7.5Y4/2 灰オリーブ色砂泥粘質土 | (地山) |
| | | | 82 | 5YR5/8 明赤褐色砂泥 | 1~5cmの礫少量混 (地山) |
| | | | 83 | 10YR6/8 明黄褐色砂泥 | |
| | | | 84 | 10YR6/8 明黄褐色砂泥 | |
| | | | 85 | 10Y4/2 オリーブ灰色砂泥 | 0.5~1cmの礫少量混 (地山) |
| | | | 86 | 10YR5/8 黄褐色砂泥 | (地山) |
| | | | 87 | 10YR5/8 黄褐色砂泥 | (地山) |

図 24 2区西隣断面図 (1:80)



- | | | | |
|-----|--|-----|---|
| 88 | 10YR3/3 暗褐色砂泥 炭、焼土層状に混ざる瓦片、土器片混、1~20cmの礫少量混 | 109 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥やや粘質 炭、焼土、土師器片混 (SA003A・Bの床面基礎) |
| 89 | 10YR4/4 褐色砂泥やや粘質 炭、焼土混 | 110 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 炭、土師器片混、1~5cmの礫中量混 (SK4) |
| 90 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 炭、焼土、瓦片、土師器片混 | 111 | 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 炭、焼土、土師器片混 (SK4) |
| 91 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 焼土混、1~20cmの礫少量混 | 112 | 10YR4/3~4/6 にぶい黄褐色砂泥粘質 炭、焼土、土師器片混、1~20cmの礫少量混 (SK4) |
| 92 | 2.5Y4/1 黄褐色砂泥やや粘質 炭、焼土、瓦片、土師器片混 5cm大の礫少量混 | 113 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥粘質 炭、焼土、土師器片混 (SK4) |
| 93 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 炭、焼土混 | 114 | 10YR4/4 褐色砂泥粘質 炭、焼土、土師器片混 (SK4) |
| 94 | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 炭、焼土、土師器片混、1~3cmの礫少量混 | 115 | 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥 炭、土師器片混 (Pit156) |
| 95 | 2.5Y4/3 オリーブ褐色泥砂 炭、焼土、土師器片混、1~10cmの礫少量混 | 116 | 2.5Y5/3 黄褐色砂泥 炭、礫混 (Pit157) |
| 96 | 10YR4/4 褐色砂泥やや粘質 炭、焼土混、3~5cmの礫少量混 | 117 | 5Y4/2 灰オリーブ色砂泥 炭、焼土、土師器片混 |
| 97 | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 炭、土師器片混、1~5cmの礫少量混 | 118 | 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 炭、焼土、土師器片混、1~5cmの礫少量混 |
| 98 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 炭、焼土、土師器片混、1~15cmの礫中量混 | 119 | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 炭、焼土、土師器片混、1~20cmの礫少量混 |
| 99 | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 炭、焼土混、1~5cmの礫中量混 | 120 | 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥やや粘質 炭多量、焼土、土師器片混 |
| 100 | 10YR3/3 暗褐色砂泥 炭、焼土、土師器片混、1~10cmの礫少量混 | 121 | 10YR4/2 灰黄褐色砂泥粘質 炭、焼土、土師器片混 |
| 101 | 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 炭、焼土、土師器片混、1~3cmの礫少量混 | 122 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 炭、土師器片混 |
| 102 | 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 炭、焼土、土師器片混 | 123 | 2.5Y3/3 暗オリーブ色砂泥 炭、焼土、土師器片混 |
| 103 | 10YR4/6 褐色粘質土 瓦片、土師器片混 | 124 | 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥粘質 炭、焼土、土師器片混 (SK136) |
| 104 | 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 炭、焼土混、1~3cmの礫多量混 | 125 | 2.5Y4/1 黄灰色粘質土 炭、土師器片混 (SK136) |
| 105 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥やや粘質 炭、焼土、土師器片混 | 126 | 2.5Y5/1 黄灰色粘質土 炭、土師器片混 (SK136) |
| 106 | 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 炭、焼土、土師器片混、2cm大の礫少量混 | 127 | 2.5Y5/6 黄褐色粘質土 (Pit177) |
| 107 | 10YR3/2 黒褐色砂泥 炭、焼土、土師器片混、漆喰混 | 128 | 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土 炭、焼土、土師器片混 |
| 108 | 10YR4/4 褐色砂泥粘質 炭、焼土、土師器片混、2~3cmの礫多量混 (SA003A・Bの床面) | 129 | 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土 炭、土師器片混 |
| | | 130 | 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥 |
| | | 131 | 2.5Y5/3 黄褐色粘質土 炭、土師器片混 |
| | | 132 | 10YR5/6 暗褐色砂泥 |
| | | 133 | 10YR4/4 褐色粘質土 (地山) |
| | | 134 | 10YR5/6 黄褐色砂泥、5~10cmの礫混 (地山) |

図 25 2区南壁断面図 (1:80)

泥地山より検出した。掘形の平面形は隅丸方形、規模は東西 0.5 m、南北 0.5 m。深さは 0.1 m。底部には建て替えが行われたのか、柱痕跡が 2 基残存するが浅い。出土遺物はヘラ削り手法を施す土師器椀、甕などがある。平安時代前期の様相を呈する土器であるが小片で、少量である。平安時代前期に属する。

その他遺構にも北一門・北二門境界推定ラインから以北約 3~4 m 付近に南北に位置する Pit 群があるが、不揃いであり、並びなど捉えきれないものが多い。しかしこの区画内には土取などの削平を受ける以前、宅地などに関連する遺構群が展開していたことが窺える。そして調査区外の西部、東部も同様の展開を考えられる。

3. 遺物

(1) 遺物の概要

遺物は平安時代から江戸時代中期にいたる時期の遺物が総計 56 箱出土した。内容は土師器、国産施釉陶器、輸入陶磁器、瓦器、須恵器、木製品、瓦類、土製品、金属製品、動物の骨などである。室町時代以前の遺物は非常に少なく、大半の遺物は桃山時代から江戸時代初頭期に属する。以下これらの遺物について概説していく。なお遺物の時期は平安京・京都 I 期～ 期の編年案に準拠する⁵⁾。

(2) 土器・陶磁器類

土器類は国産施釉陶磁器類が多く出土している。主体となるのは美濃産の施釉陶器で、唐津系のものは灰釉を掛けた青唐津の椀、皿、壺が少量の出土である。焼締陶器は丹波と信楽産の播鉢が同程度に出土しており、輸入陶磁器は少量である。数量的には土師器皿の破片は多数を占めるが、1 個体として見れば美濃の陶磁器類はかなり多く、全て大窯で生産されたものであり、いわゆる織部として分類できるものは出土しなかった。また唐津は古手の青唐津に限られ少量出土している。ここに概説する 1 区堀状遺構 SX 8、2 区土壇 SX82・廃棄土壇 SX10 出土の土器・陶磁器類

は XI 期古（16 世紀末～ 17 世紀初頭）の一括資料と考える。

1 区堀状遺構 SX 8 出土土器（図 26、図版 5、付表 1）

出土土器には土師器は皿・焙烙・塩壺。瓦器は鉢・羽釜。国産施釉陶器は美濃灰釉皿類、鉄釉皿類・鉄釉天目茶椀・長石釉椀皿類、黄瀬戸向付。唐津産の灰釉椀・灰釉壺。焼締陶器には備前甕・盤・播鉢、信楽播鉢、丹波播鉢。輸入陶磁器には明染付の皿などがある。以下、図示したものを概説する。

土師器皿には皿 Nr（1・2）、皿 Sb（3）、皿 S（4・5）、がある。皿 Nr は口径 5.4～6.0 cm。器高 1.2 cm。ナデ調整施さず、口縁端部は歪で粗雑、底部が押し上げられている。皿 Sb は口径 9.8

表 3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代	土師器、緑釉陶器、灰釉陶器、須恵器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦		須恵器 1 点、軒丸瓦 2 点、軒平瓦 1 点		
桃山時代 ～江戸時代	土師器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、土製品、木製品、銭貨、金属製品、ガラス製品、石製品、骨角製品、食物残渣		土師器 36 点、瓦器 4 点、施釉陶器 33 点、焼締陶器 10 点、輸入陶器 6 点、金箔軒丸瓦 1 点、飾り瓦 1 点、土製品 6 点、木製品 34 点、漆器 9 点、銭貨 4 点、金属製品 2 点、ガラス製品 1 点、石製品 8 点、骨角製品 1 点		
合計		70 箱	160 点 (14 箱)	46 箱	10 箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より14箱多くなっている。

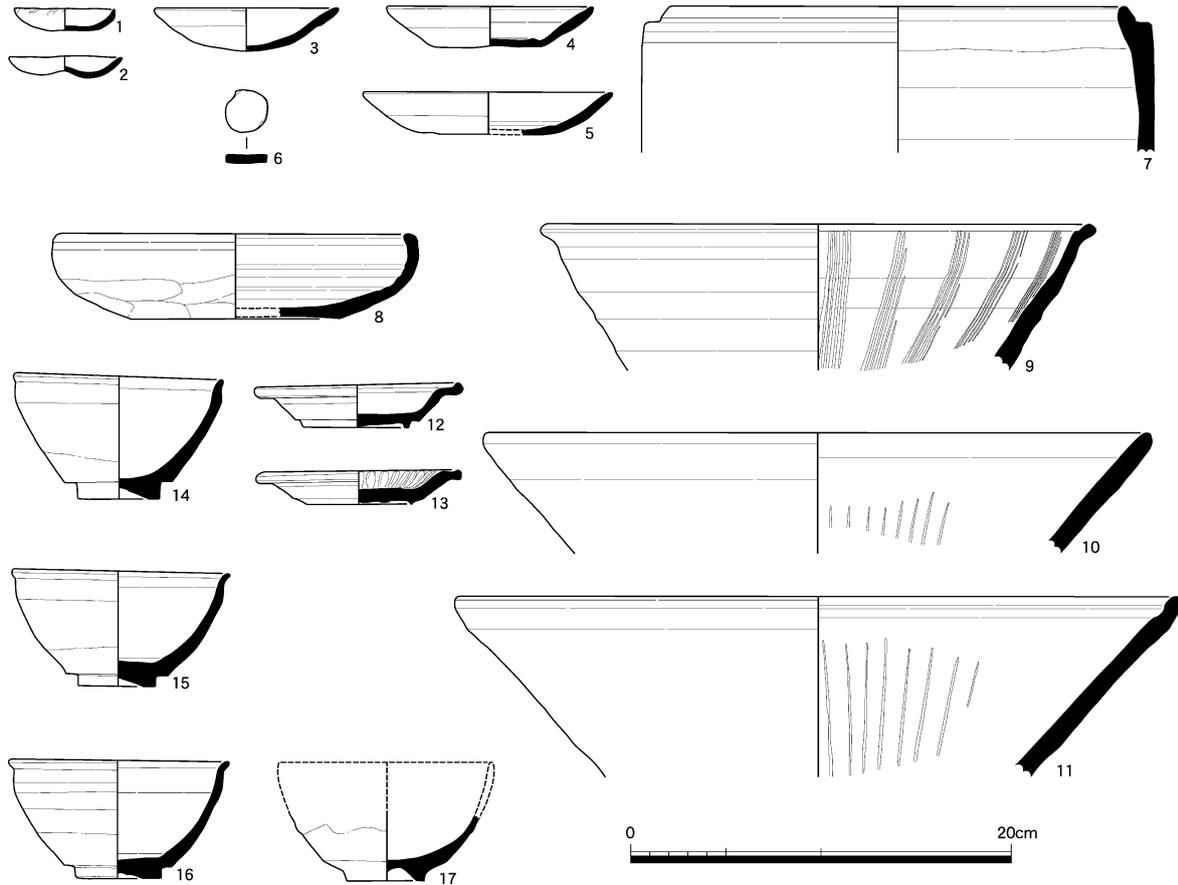


図 26 1区SX 8出土土器実測図（1：4）

cm、器高 2.3 cm。内面立ち上がりに指押さえ痕が 3 箇所残る。皿 S は口径 10.9 ～ 13.2 cm、器高 2.2 cm。（5）はやや大きいタイプに属し、体部は直線的である。2 次的焼成を受け内面と外面が焼けた痕跡が残る。（6）は土師器の遊び道具のおはじきと思われる。土師器皿を円形に打ち欠き加工されている。径 2.1 cm、厚さ 0.4 cm の大きさである。

瓦器には火鉢（7）がある。内に内傾し立ち上がる蓋受けを有する。おそらく筒形で体部の上位には円孔が穿たれるものと思われる。

焼締陶器には備前鉢、信楽播鉢、丹波播鉢がある。備前盤（8）は器表は赤褐色で胎土は硬質である。器高の低いもので、丸みを持つ口縁部が内湾しながら立ち上がる。底部立ち上がりから体部中位まで削り痕跡が残る。

信楽播鉢（9）は長石を含んだ赤褐色の胎土を有する。口縁部外方に小さく折れ曲がる。体部内面の櫛目は 5 本一単位で下から上へと施される。

丹波播鉢（10・11）は口縁部が丸く収まるものと、方形状のを呈するものがある。櫛目はいずれも一本単線。どちらにも外面に指押え痕跡が微かに残る。

国産施釉陶器には美濃の鉄釉折縁皿、灰釉折縁鍋皿、鉄釉天目茶碗、唐津の灰釉碗がある。鉄釉折縁皿（12）は鉄釉が施され、内面見込みに胎土目、高台裏に輪トチが残る。口径は 11.0 cm、器高 2.3 cm の完形品。

灰釉折縁鎚皿（13）は内面見込が釉剥ぎされ、高台裏は径約 0.5 cm の目跡が 3 箇所残る。高台は削り込み高台。口径は 10.8 cm、器高 1.8 cm。

鉄釉天目茶椀（14～16）は口径 11.0～11.6 cm、器高 6.2～6.7 cm。口縁端部は外反する。体部は（14）が直線的に立ち上がり、他は緩やかである。釉は外面腰部まで施される。高台はいずれも内反り高台。なお（14）には内面見込に茶筌の痕跡が明確に残る。

唐津灰釉椀（17）は濃緑色の釉が掛けられたいわゆる青唐津とよばれるものである。高台畳み付けに目跡が 3 箇所残るが、内面には見られない。

2 区土壌 SX82 出土土器（図 27、図版 5、附表 2）

出土土器には土師器類は皿、鍋、焙烙、火鉢。瓦器類は羽釜、丸底小鉢、瓦灯。国産施釉陶器には美濃の灰釉皿類・鉄釉皿類・鉄釉天目茶椀。焼締陶器には信楽の播鉢・甕、丹波の播鉢。輸入陶磁器には明染付・白磁、李朝灰釉平椀。他に鑄造関連土器類、土製品などがある。

土師器皿には皿 Nr（18・19）、皿 Sb（20・21）、皿 S（22・23）、皿 S 大（24）がある。Nr は口径 5.3～5.6 cm、器高 0.9～1.1 cm。口縁端部が歪で粗雑である。皿 Sb は口径 9.3～9.5 cm、器高 1.9～2.3 cm。内面の口縁端部にわずかな窪みと端面を有する。皿 S は口径 10.1～10.6 cm、器高 2.1～2.3 cm。内面の口縁端部にわずかな窪みと端面を有するもので、内面には強くナデ上げた痕跡が残るものがある。またこれらは鑄造関連の取瓶に転用されたと思われ、赤褐色と暗褐色に焼けた痕跡が顕著に残る。皿 S 大は口径 12.2 cm、器高 2.0 cm。器厚は比較的薄く仕上げられシャープな印象がある。二次的な焼成を受けて器表は黒く、煤けている。

他の土師器類には焙烙、盤がある。焙烙（25）は使い込んだのか外面は全体に黒く煤け、内面底部も煤ける。体部は緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁端部は粘土を継ぎ足して玉縁状を呈する。外面の口縁部下から底部にかけてケズリが丁寧に施される。また内面立ち上がりから口縁部にかけてヘラ工具でナデた調整痕が明確に残る。口径 29.0 cm、器高 6.9 cm。

香炉（26）は三足の足を底部に据え付けられると思われる。底部から屈曲して立ち上がり、丸みを持った口縁部に至る。体部下位は丁寧なケズリが施され、一部口縁部まで達する。内面には底部から体部にかけて、ベンガラが付着している。口径 20.6 cm、器高 6.0 cm。

土製品取瓶（27）は、全体に丸みを持った体部で、器高は低い。口縁は方形状で平坦な端面を有する。強い熱を受けたため器体断面は剥離が多く見られ、内面には緑青や銅滓の付着が認められる。口径 12.5 cm、器高 5.0 cm、器厚 1.4 cm。

焼締陶器には丹波播鉢、備前播鉢、信楽播鉢がある。丹波播鉢（28）は櫛目は 1 本単線で放射状。口縁部は丸みを持った三角形状で内傾する。外面中位と下位に平行して指押さえ痕跡が残る。

備前播鉢（29）は口縁部が丸みを持って立ち上がり、幅広の縁帯を持つものである。口縁部小片のため櫛目など全体像は不明である。

信楽播鉢（30）は三角形状で外上方に丸くつまみ上げた端部を有する。櫛目は 5 本単位で間隔は不揃いである。内外面共に長石の浮き出しが顕著に見られ、底部には焼成時に敷かれた離れ砂が薄く付着する。

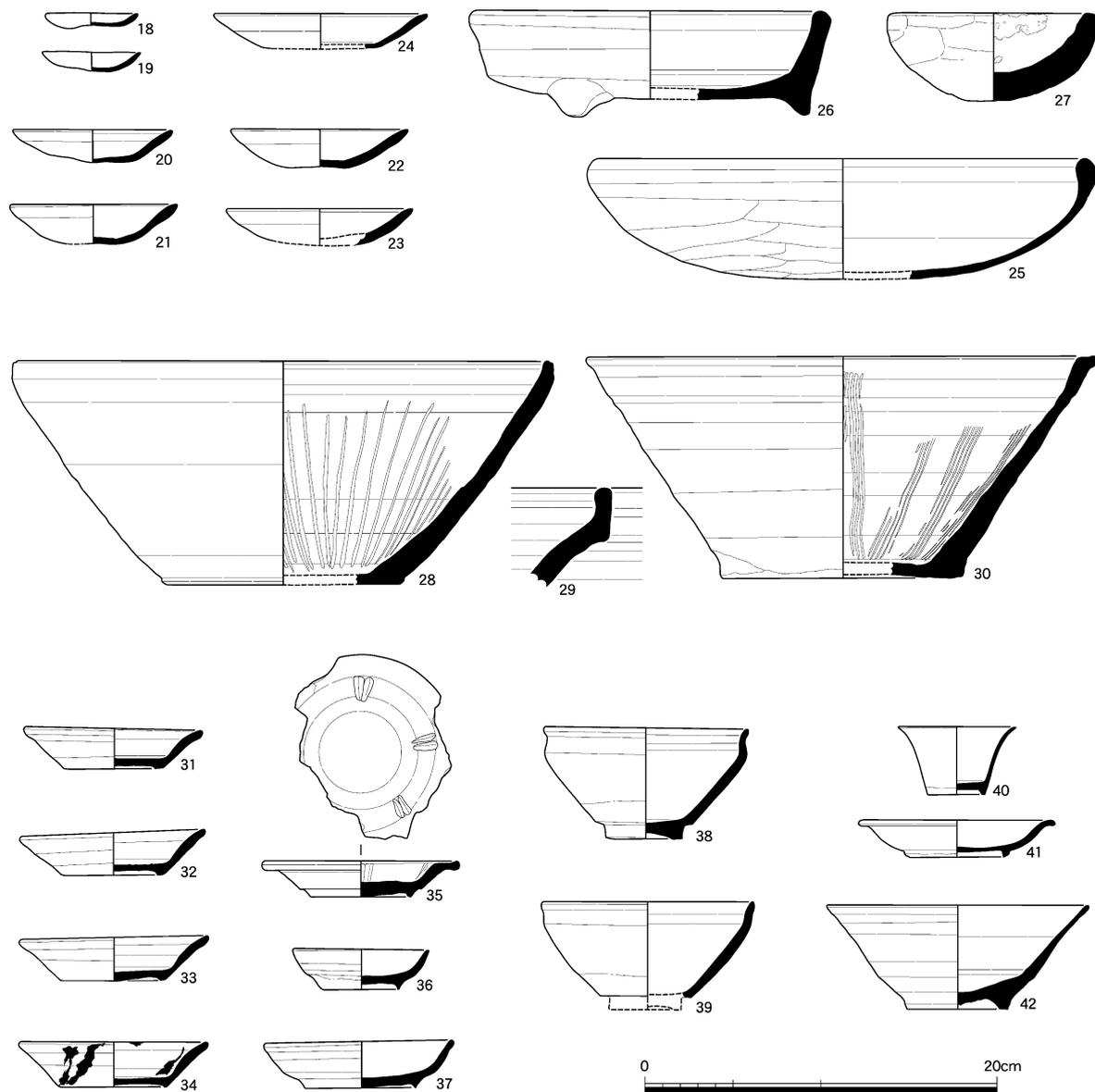


図 27 2区 SX82 出土土器実測図（1：4）

国産施釉陶器には美濃の鉄釉稜皿、灰釉折縁皿、灰釉皿、長石釉皿、鉄釉天目茶碗などがある。鉄釉稜皿（31～34）はいずれも外反気味に開いて立ち上がる体部を有するもので、釉は全面施釉される。内面には3方向の胎土目が明確に残る。高台は水平な端面をもつ削り込み高台で、高台内には輪トチンの痕跡が残る。口径 10.2～10.8 cm、器高 2.4～2.6 cm。

灰釉折縁皿（35）は釉が全面に施される。内面体部には2本の鑄が3方向見られ、完形品では5方向の鑄が施されるものと思われる。見込みには釉剥ぎが施され、輪トチン痕跡が残る。高台は削り出し輪高台。高台内にも輪トチンの痕跡が顕著に残る。口径 11.3 cm、器高 2.0 cm。

灰釉皿（36）は緩やかに立ち上がる体部を有し、釉は全面施釉される。内面と高台脇に厚く釉溜まりできる。高台は削り込み高台で、高台内にも輪トチンの痕跡が顕著に残る。口径 9.8 cm、器高 2.4 cm。

長石釉皿（37）は体部が緩やかに立ち上がり、丸みを持った口縁部はわずかに外反する。釉は全面施釉され、内面には印花が施されるが明確ではない。高台は貼り付け高台で、高台内には輪トチンの痕跡がわずかに残る。口径 10.9 cm、器高 2.7 cm。

鉄釉天目茶碗（38・39）は口径 11.7 ～ 12.1 cm、器高 6.0 ～ 6.4 cm。（38）は直線的な体部を有し、口縁端部は大きく外反する。高台は内反り高台。（39）は体部が直線的ではあるが口縁部の外反は小さい。釉は外面腰部まで施され、腰部から高台にかけ錆化粧が施される。高台は欠損している。

輸入陶磁器には白磁小盃、白磁皿、李朝蕎麦茶碗がある。白磁小盃（40）は外反しながら立ち上がる体部で、口縁部に至る。釉は外面高台際以外は施釉を施す。口径 6.7 cm、器高 3.9 cm。

白磁皿（41）は口縁部がきつく外反する皿である。釉は高台端面以外は施釉を施す。輪高台の端面には離れ砂が一部付着する。口径 11.2 cm、器高 2.1 cm。

李朝灰釉平碗（42）は腰部に膨らみを持ち、器厚の薄い口縁部は緩く外反しながら立ち上がる。内面見込みにはその膨らみに合わせて段が施され、中央部は深く窪む。釉は灰オリーブ色の総掛けであるが、比較的薄く、腰部以下は焼成により釉が飛んでいる。高台は削り出し、見込みは兜巾状を呈する。内面見込みと高台端面に、目跡類らしきものが残るが顕著ではない。李朝の灰釉平茶碗である。斗々屋・蕎麦系茶碗の可能性⁶⁾がある。

2 区廃棄土壌 SX10 出土土器（図 28、図版 6、附表 3）

出土土器には土師器類は皿・焙烙・火消し壺・小型壺・塩壺、瓦器類は瓦灯・丸底小鉢・羽釜・炉、国産施釉陶器には美濃灰釉皿類・志野茶碗・志野向付・鉄釉天目茶碗・鉄釉皿類、唐津灰釉碗、輸入陶磁器には明染皿・白磁・青磁、焼締陶器には信楽搦鉢、備前盤・甕・搦鉢、丹波搦鉢などが出土している。また図示できるものは限られたが、鑄造関連の土器片が多く見られた。

土師器皿には皿 Nr（43～47）、皿 Sb（48）、皿 S（49～55）、がある。皿 Nr は口径 5.4 ～ 5.6 cm と 7.2 ～ 7.4 cm、器高 1.4 cm の大・小の 2 タイプに分けられる。口縁部はいずれも粗雑、底部は軽く押し上げたものと、きつく押し上げたものがある。（46）は内面と口縁に煤が付着し、灯明皿に使用したものと思われる。皿 Sb は口径 9.2 cm、器高 2.0 cm。内面口縁端部にわずかな窪みを有する。比較的丁寧にナデが施され、仕上げにナデ上げ痕跡が残る。皿 S は口径 9.4 ～ 12.8 cm。灰白色系の胎土を有するものが多い。（52）は新相で、圈線が顕著である。他は内面口縁部に端面を有する。器厚の厚いものと薄いものが有り、圈線痕跡も幅広で明確なものではない。

他の土師器類には焙烙（56・57）、小型丸底壺（58～60）がある。焙烙はいずれも体部は台形で成形されたもので、口縁部はつぎ足しされている。（56）は口縁部が屈曲し外上方へ内湾しながら開くタイプ。（57）は玉縁状の口縁部を有するもので、口縁部直下につぎ足しの痕跡が残る。内面は木製品の篋工具の調整痕が残る。小型丸底壺は器高の浅いものと、深いものがある。浅いものは口径が広く、底が丸みを持つ。深いものは口径が狭く、底が平坦である。

瓦器には丸底小鉢（61）、ミニチュア羽釜（62・63）がある。丸底小鉢は手づくねで成形されたもので、器形は砲弾形。内面は非常に平滑であるが何かの工具で掻き取った痕跡が 3 条残る。口縁端部は平坦面を有する。口径 10.2 cm、器高 7.3 cm。図示はできなかったがこの遺構からは他

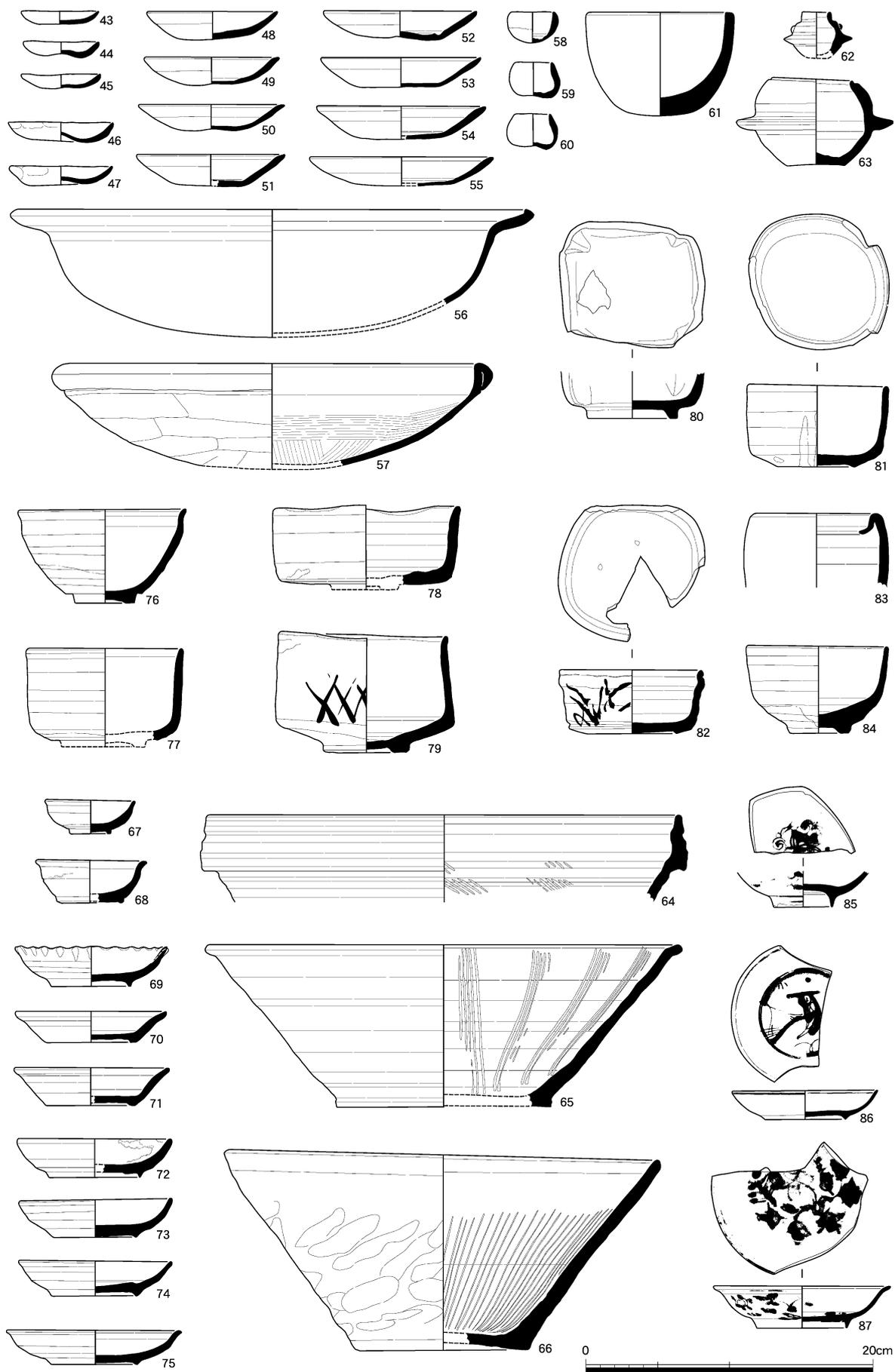


图 28 2区SX10出土土器实测图(1:4)

にも小片が多数出土している。ミニチュア羽釜には大・小と2タイプある。小(62)は口径2.0 cm、最大径は4.8 cm。大(63)は口径5.5 cm、器高6.2 cm、最大径は11.3 cm。

焼締陶器には備前播鉢、信楽播鉢、丹波播鉢がある。備前播鉢(64)は器表、胎土共に赤褐色で硬質である。口縁部が直立する縁帯には凹帯が巡る。内面は破片のため全体像は確認できないが、5本単位の櫛目が、斜めに走る。

信楽播鉢(65)は口縁部が丸く収まる方形状で外反する。櫛目は5本単位である。

丹波播鉢(66)は方形状の口縁部を有する。櫛目は1本単位で放射状に上から下に搔かれる。外面体部には指押え痕跡が残る。

国産施釉陶器には美濃の灰釉小盃、長石釉小盃、鉄釉襷皿、鉄釉稜皿、灰釉皿、長石釉皿、鉄釉天目茶椀、鉄釉筒茶椀、瀬戸黒茶椀、志野茶椀、灰釉四方向付、志野向付、志野水指、唐津灰釉椀などがある。灰釉小盃(67)は体部中位に張りを持ち口縁部はわずかに外反する。釉は体部下位まで施される。高台は削り出し高台。口径6.4 cm、器高2.4 cm。

長石釉小盃(68)は丸みを持って立ち上がり、口縁部はきつく外反する。釉は全面施釉。一部わずかに緋色が認められる。口径7.8 cm、器高3.0 cm。

鉄釉襷皿(69)は口縁部を指で押さえ輪花を施すものである。釉は全面施釉、内面見込みに3方向の胎土目、高台内に輪トチ痕跡が残る。高台は付け高台。口径10.6 cm、器高2.8 cm。

鉄釉稜皿(70・71)はいずれも外反気味に開いて立ち上がる。釉は全面施釉。内面見込みに胎土目、高台内に輪トチ痕跡が残る。高台は削り込み高台。口径10.6～10.9 cm、器高2.2～2.7 cm。

灰釉皿(72～74)は(72)は取瓶に転用されたもので、銅滓が付着する。鑄造関係に使用されたと思われる。(73)は内面見込みが釉剥ぎされ盛り上がる。高台内に輪トチ痕跡が残る。見込み以外施釉。(74)は内面に鑄造関係の溶液が垂れたのか、釉が溶けて銅色に光るものが付着する。いずれも高台内に輪トチ痕跡が残る。

長石釉皿(75)は緩やかに立ち上がり外反する口縁部を有する。白濁した釉が全釉され、緋色と貫入が認められる。外面高台際に目跡が残る。口径12.2 cm、器高2.4 cm。

鉄釉天目茶椀(76)はやや直線的に立ち上がり、外反する口縁部を有する。釉は外面腰部まで施され、腰部から高台にかけ錆化粧が施される。高台は内反り高台。口径11.8 cm、器高6.6 cm。

鉄釉筒茶椀(77)は張りを持った腰部から直立して立ち上がる体部を有し、丸みを持った口縁部に至る。釉は腰部まで施される。高台部は欠損している。口径11.0 cm。

瀬戸黒茶椀(78)はわずかに丸みを持った腰部から直立して立ち上がる半筒形の茶椀で器高の低いタイプ。内面には茶溜まりを有する。横方向のヘラケズリが体部中位から底部にかけて施され、口縁部には篋による面取り痕が認められる。釉は高台際まで施釉が施される。高台は欠損しているが低い高台を有するものである。

志野茶椀(79)は体部には鉄釉で檜垣文が絵付けされるものである。内面見込みには茶溜まりを有する。直線的に開き屈曲する腰部から、やや内傾しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。体部には縦に入れた篋ケズリの面取りが残る、口縁端部にも認められる。高台は幅広の

低い高台が施される。釉は高台際まで掛り、釉薬に浸ける際の指跡と思われる痕跡が残る。口径 11.8 cm、器高 8.5 cm。

灰釉四方向付（80）は下部のみで上部は欠損しているが、型打ち後に入り隅四方形に成形された向付である。高台の際まで釉が施される。

志野向付（81・82）は体部を撫四方に成形したものである。（81）は丸みを持った腰部から立ち上がる体部で、中位がわずかに膨らむ。口縁部は丸みを有する。釉は全面に施され、緋色が一部に認められる。高台は削り込み高台。内面見込に針トチ痕跡が3方向、高台際には目跡が3方向残る。口径 9.8 cm、器高 5.8 cm。（82）は口縁部はS字状を呈する。体部全体に貫入が多く、絵付けは鉄釉で草文が描かれる。内面見込に針トチ痕跡が残る。釉は底部以外に施される。高台は削り込みで碁笥底である。口径 10.0 cm、器高 4.5 cm。

志野水指（83）は全体像は不明であるが水指と考える。丸みを持った体部から、内へ折り曲げて蓋置の凸帯を設ける。絵付けは一部鉄絵が描かれるが不明。緋色、貫入が口縁部に認められる。

唐津灰釉碗（84）は灰釉を施したいわゆる青唐津である。美濃の胎土が灰白色なのに対し暗灰色である。器表は赤褐色。内面から外面腰部まで濃緑色の釉が施される。口径 10.0 cm、器高 6.2 cm。

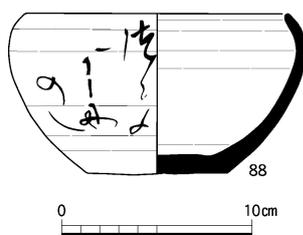


図 29 2区 SX10 出土須恵器鉢
実測図（1：4）



図 30 2区 SX10 出土須恵器鉢

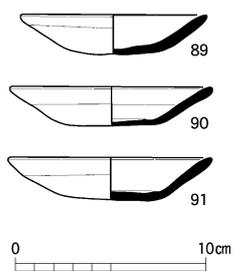


図 31 2区 SK27 出土土器
実測図（1：4）

輸入陶磁器には明染付（85～87）がある。（85）は碗である。盛り上がった内面見込、外面に草花文。高台裏に天下泰平と描かれる。（86・87）は皿である。（86）は内面見込みに人物像を描く。口径 10.2 cm、器高 2.1 cm。（87）は内外面に草花文を描く。口径 12.4 cm、器高 3.0 cm。いずれも高台畳み付けには離れ砂が付着する。

この時期の遺物ではないが SX10 から出土した平安時代の須恵器鉢（図 29・30 - 88）である。平坦な底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部は内へ内傾する。外面体部には縦3行に草書体と平仮名が墨書される。おそらく3文字単位で書かれており、右1行は「佐りの」、2行目は2文字目が「丹」と判読できるが上下は不明である。3行目は1文字目は欠損し不明であるが、2文字目を「の」、3文字目が部首にシンニョウを使った草書文字と推測される。意味内容は解説不明である。平安時代10世紀以降の墨書土器である。

2区土壌 SK27 出土土器（図 31、付表4）

出土遺物には土師器皿 Sb（89）、皿 S（90・91）がある。皿 Sb は口径 9.9 cm、器高 2.2 cm。皿 S は口径 10.6～12.7 cm、器高 2.1 cm。Ⅱ期古の新しい様相をもつ。

(3) 木製品

木製品は1区堀状遺構 SX 8、2区廃棄土壌 SX10 から多く出土している。内容は漆製品、箸、曲物底・蓋、下駄、櫛、御敷、部材、荷札、羽子板、杓、篋、糸巻の部品、板状製品、棒状製品、不明製品などである。以下 SX 8・SX10 で図示した木製品について概説していく。

1区堀状遺構 SX 8 出土木製品 (図 32)

箸(木 1～5) 細く割り割いた柾目材に面取を施し加工したものである。長さは 21 cm 前後から 23 cm。断面は、方形状と楕円形のものが 0.4～0.6 cm。幅は削って先細りするもの、均等なものがある。

不明木製品(木 6・7) (木 6) は凹凸状を呈するで中央部に径 0.2～0.3 cm、深さ 0.3 cm の孔が穿たれる。(木 7) は鍵形木製品で取手状の中央に円形の径 0.8 cm 孔が穿たれ、棒状部分にも径 0.8 cm 孔が穿たれ貫通する。

曲物・桶底(木 8～10) (木 8) は曲物の蓋になるもの。残長 15.7 cm、残幅 3.2 cm、厚さ 0.7 cm。復元径が約 24.0 cm 前後の規模になる。周縁に沿って幅 0.4 cm、深さ約 0.1 cm の窪みが施される。(木 9) は曲物の底になるものである。残長 10.2 cm、残幅 4.3 cm、厚さ 0.3～0.5 cm。桶底(木 10) は残長 33.7 cm、残幅 8.2 cm、厚さ 1.0～1.2 cm。復元径が約 24.0 cm 前後

羽子板(木 11) 全長 35.5 cm、幅 7.5～8.4 cm。取手部の幅 2.8～3.6 cm。厚さ 1.0 cm 前後。敲打痕らしきものはない。

折敷(木 12) 隅切折敷の底板部分である。長さ 29.8 cm、厚さ 0.6 cm、残幅 11.0 cm。おそらく漆を塗られたものであろう。漆は暗褐色に変色している。隅切り方形の板底に木釘で組み合わせの側板を付けるもの。側面に木釘と木釘痕跡の小孔が残る。

下駄(木 13・14) (木 13) は角型の削り下駄である。全長 19.7 cm、幅 8.0 cm、残高 3.0 cm。(木 14) は丸形の連歯下駄である。全長 20.3 cm、幅 5.4 cm、残高 4.0 cm。いずれも一木作り。

櫛(木 15) 挽歯技法による横櫛。櫛歯は欠損している。円弧状を呈し、隅丸に仕上げたものである。

2区廃棄土壌 SX10 出土木製品 (図 33)

箸(木 16～20) 細く割り割いた柾目材に面取を施し加工したものである。長さは 21.8～24.0 cm。断面は 0.5～0.7 cm、方形状と楕円形のものが 0.5～0.7 cm。幅は削って先細りするもの、均等なものがある。

篋状木製品(木 21・22) (木 21) は残長 21.1 cm、幅 1.9 cm、厚さ 0.3 cm。幅 1.0 cm。(木 22) は残長 29.1 cm、幅 2.0 cm、厚さ 0.2 cm。幅 1.4 cm いずれも柄部から片側に広がり、先端はすばまる。(木 22) は先端部に面取り仕上げされる。

折敷(木 23～25) (木 23) は折敷の側板である。黒漆が内外面に薄く残る。全長 26.0 cm、幅 2.7 cm、厚さ 0.7 cm。隅切りに仕上げされ、底板にあたる位置に径 0.3 cm の木釘痕跡の小孔が 5 箇所残る。(木 24・25) は隅切折敷の底板部分である。(木 24) は残長 16.5 cm、厚さ 0.5 cm、幅 4.5 cm。

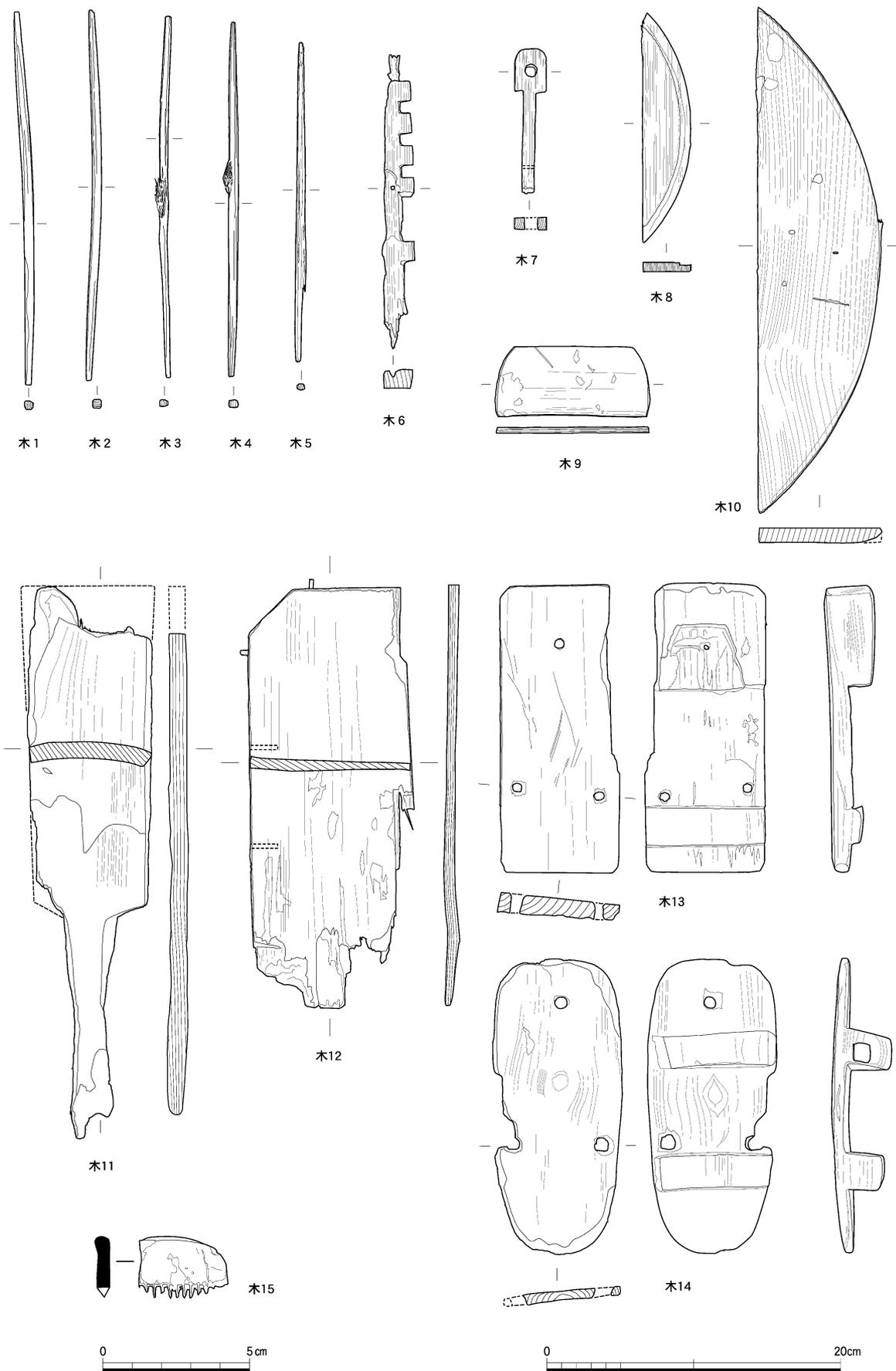


图 32 1区 SX 8 出土木製品実測図 (1 : 4)

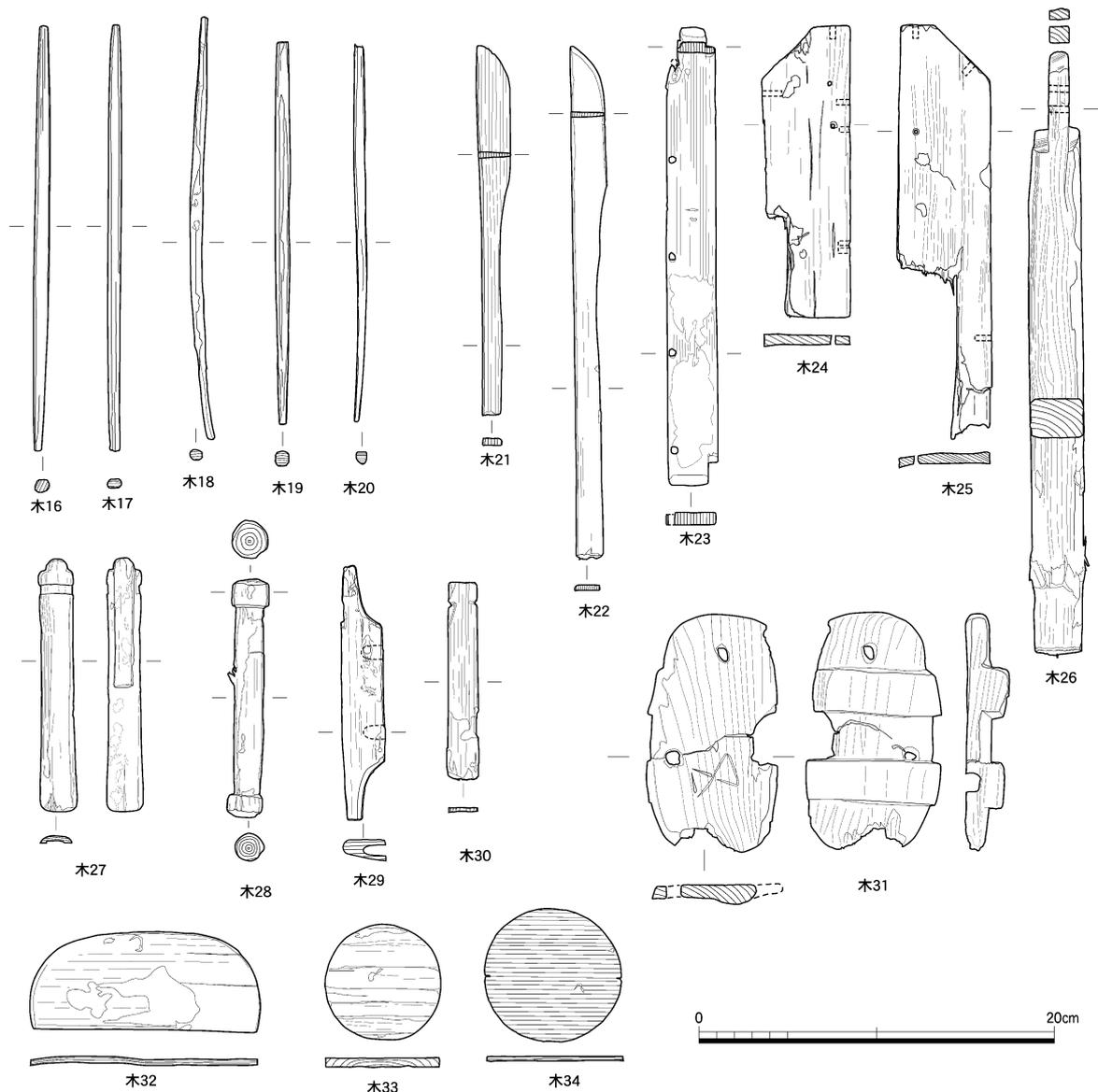


図33 2区SX10出土木製品実測図(1:4)

側板、底板、脚部を組み合わせるための径0.3cmの木釘痕跡が認められる。(木25)は残長23.0cm、厚さ0.5cm、幅5.1cm。0.3cmの木釘痕跡が残る。

部材(木26)長さ34.2cm、幅3.0cm、厚さ2.0cmの方形棒状。棒状の四隅は面取り仕上げされる。先端にはダボを有し、釘穴が2箇所穿たれる。

刀子の柄(木27)は全長14.5cm、厚さ0.2~0.5cm、幅1.7cm。表面は円弧状、裏面は平坦面に加工され、中央から先端にかけて方形状の窪みを有する。

不明木製品(28)両端に肥厚した円柱状に加工したもの。全長13.3cm。

糸巻(木29)梓木の部分である。内より腹面に径0.7cmの小孔が2箇所穿たれる。

荷札(木30)先端部に切り欠を入れる。全長11.0cm、厚さ0.2cm、幅1.6cm。墨書は見られない。

下駄(木31)木13は一木作り角型の連歯下駄である。残長13.4cm、幅7.5cm、残高2.0cm。14は丸形の連歯下駄である。全長20.3cm、幅5.4cm、残高4.0cm。足の表面に鼓状の記号が彫られる。

曲物底板（木 32～34）（木 32）は半分に分れているが小判状を呈するもの。全長 13.0 cm、厚さ 0.4 cm、残幅 5.4 cm。（木 33）は径 6.4、厚さ 0.5 cm。（木 34）は径 7.7 cm、厚さ 0.2 cm の円形状。いずれも側板との接合痕はない。

（4）漆器（図 34）

今回の調査では漆器が数点出土している。種類は椀、皿、折敷の底板、側板、不明製品などがある。1 区堀状遺構 SX 8、2 区廃棄土壇 SX10・土壇 SX82 より出土した。以下、図示した漆製品の概説を述べる。

漆器（漆 1～9）（漆 1）は器高の低い椀である。器の器厚は薄く成形され、内外面に赤漆を丁寧に塗られるが文様は見られない。口縁部端部は小さな玉縁状を呈し、高台は低い。根来塗手に分類される。（漆 2）は丸く内湾しながら立ち上がる椀である。高台部は外に張り出すハの字型。内赤外黒に塗り分け。（漆 3）は器厚の厚いタイプで高台は外に張り出し、高さがある。漆は内赤外黒に塗り分け。いずれも文様は見られない。（漆 4）はやや器厚の薄い上手物の椀の破片である。内外両面に赤漆が塗られ、外面に草・果実文が黒漆で緻密に描かれる。（漆 5）は口縁部は歪んでいるが内湾しながら立ち上がるもの。内外面黒漆が塗られ、外面は施文は不明。内面に草木文が描かれる。（漆 6）は腰の張った体部から直線的な体部を有する。内外面黒漆を塗り、内面見込に

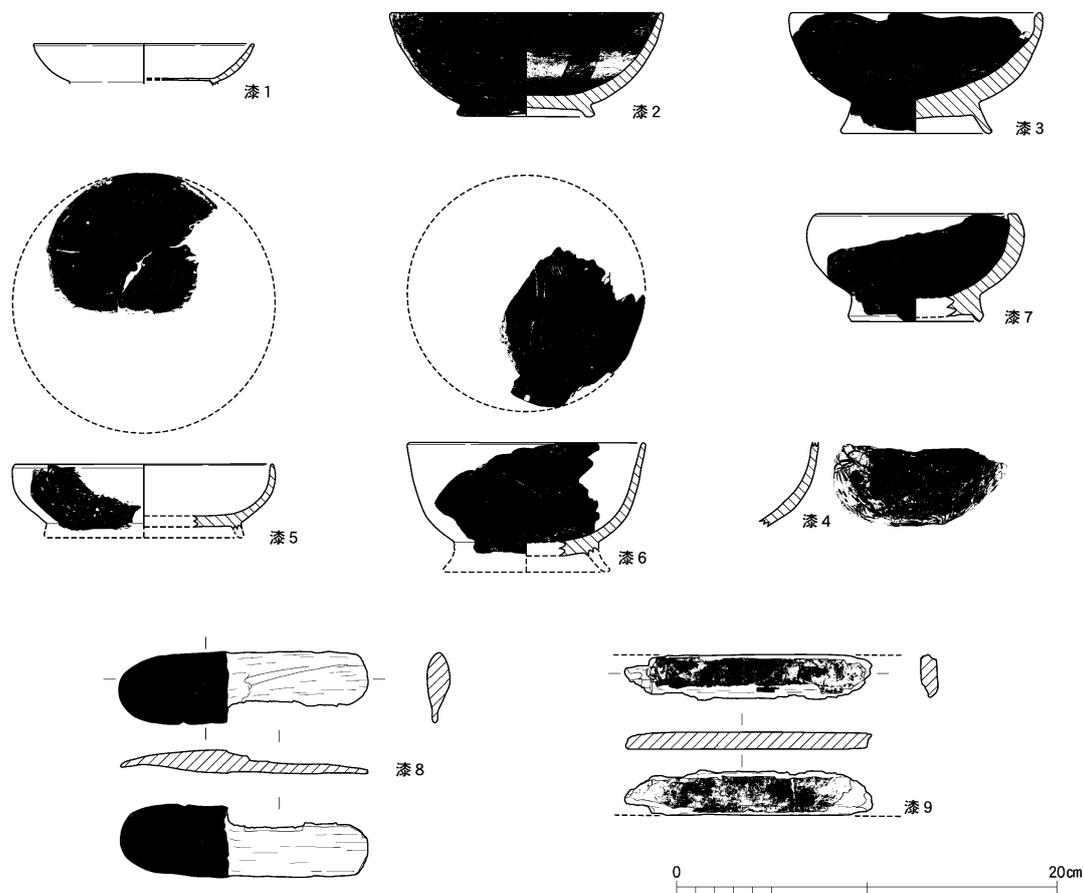


図 34 1 区 SX 8、2 区 SX10・SX82 出土漆器実測図（1：4）

鶴の足らしきも文様が赤漆で描かれる。外面は草木文らしきものが描かれるが全体像は不明。(漆7)は内外両面に黒漆が塗られる。口縁部は歪み変形している。(漆8)は黒漆塗りの不明製品である。片部は漆が剥離したのか、欠損している。(漆9)は折敷のなどの側板の可能性のあるもの。両面には黒漆を塗った後に、赤漆が塗られ、側面には黒漆のみが塗られる上手物である。

なお漆器の分析・技法などは、北野信彦氏(くらしき作陽大学)にお願いし、付章で概説を執筆していただいた。

(5) 瓦類 (図 35・36)

瓦類は両地区ともに出土品は江戸時代中期以降の棧瓦を除き少量であった。図示した瓦は1区堀状遺構 SX 8、2区廃棄土壌 SX10・整地層から出土した。飾り瓦、金箔瓦以外は混入遺物である。

複弁八葉蓮華文軒丸瓦(瓦1) 平城宮 6306 型式である。中房は圏線が巡る。外区は2本の圏線内に珠文を巡らす。周縁は傾斜し、その面に鋸歯文を巡らす。蓮弁は凸線で、子葉は盛り上がる。間弁が中房圏線に接する。胎土は精良で淡橙色、やや軟質。平城京からの搬入瓦である。2区 SX10 から出土。同文例は民部省から出土している⁷⁾。

単弁八葉蓮華文軒丸瓦(瓦2) 周縁は幅が狭く、外区に2本の圏線が巡り、その中に珠文が密に巡る。その外側には巻き込みの強い唐草文が巡る。内区には扁平な桃実状の花弁を配する。中房は一段窪んで蓮子を10前後を配する。また中房際に版キズが2箇所残る。胎土は砂粒を含み黄灰色、やや軟質。平安時代中期から後期に属する。1区 SX 8 から出土。大宮・北山ノ前瓦窯跡出土品に同文あり⁸⁾。

唐草文軒平瓦(瓦3) 界線に区切られた外区にやや密に珠文を巡らす。内区には主葉が強く巻き込み、子葉は上下に展開する。胎土は粗く黄灰色で硬質。平安時代中期に属する。山城産。2区 SX10 から出土。

三巴文金箔軒丸瓦(瓦4) 周縁は広くとられ、直立する縁である。圏線はなく大粒の珠文が巡る。巴文は右巻きで、巴の尾先は次の巴とわずかに離れる。周縁、巴文には金箔が貼られる。胎土は

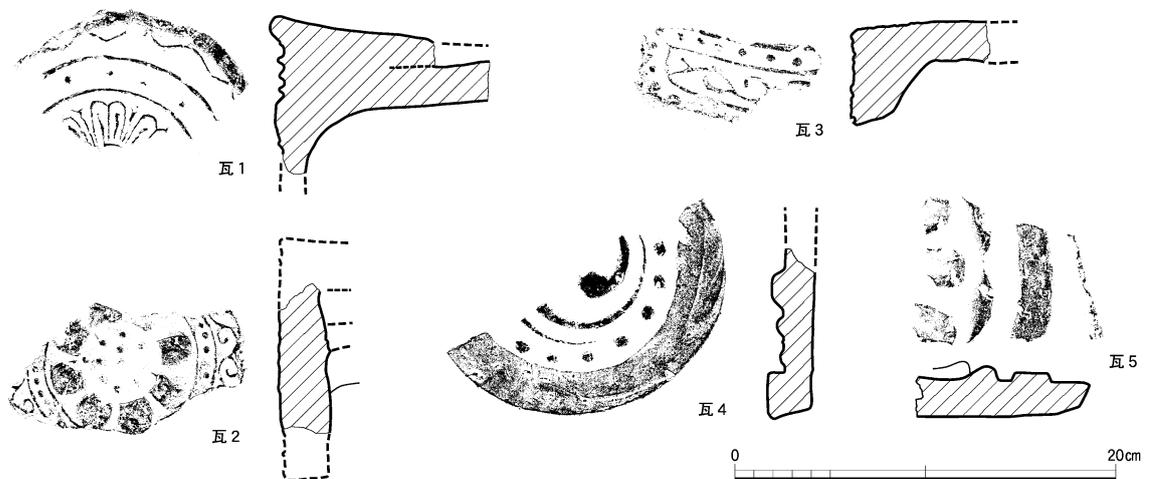


図 35 軒瓦・飾り瓦拓影・実測図(1:4)

精良で灰白色、やや軟質。桃山時代に属する。2区SX10から出土。

飾り瓦（瓦5） 飾り瓦の一部である。裏面、側面は丹念に削り調整される。周縁は幅広で低い。周縁内には花文を配する。胎土は精良で灰色、硬質。桃山時代から江戸時代初頭に属する。2区整地層から出土。



図36 軒瓦・飾り瓦

(6) 金属製品 (図37)

金属製品は鉄釘、銅滓、煙管、棒状製品、留金などあるがごく少量である。

(金1) は径0.6cmの円環状の把手部か。真鍮製品である。

(金2) は先細りの細い不明棒状製品である。全長は11cm前後。銅製品の可能性がある。

いずれも1区堀状遺構SX8から出土。

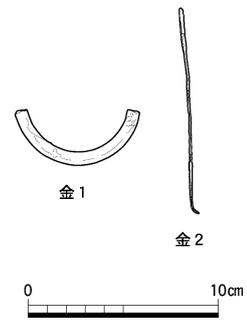


図37 金属製品実測図 (1:2)

(7) 銭貨 (図38)

1区 SX82、SK127、SX10、SE2から出土したものである。

(銭1) は太平通寶(真書)、(銭2・3) は元祐通寶(行書・隸書)、(銭4) は熙寧元寶(隸書)である。

(8) 石製品 (図39)

石製品には砥石、硯、石錘、水晶があり、1区堀状遺構SX8、2区整地層・廃棄土壌SX10・土壌SX82から出土している。

砥石(石1~3) 長方体と板状のものがある。(石1) は残存長9.6cm、厚さ0.9cm、幅3.8cm。(石2) は残存長7.5cm、厚さ1.1cm、幅2.8cm。(石3) は残存長4.8cm、厚さ0.8cm、幅2.9cm。使用面に平仮名で「ま」と読める線刻がある。

石錘(石4) 扁平な球体を呈する。四方に切り欠きが入る。

碁石(石5・6) 円形状で、厚さ0.5cm。色調は黒色。

水晶(石7) 六面体を呈し、先が面取りされ尖る。

硯(石8) 長方形の硯である。残存長12.6cm、幅5.8cm。硯面は長円形を呈し、陸部には墨の付着が明確に認められる。周縁は低く、直立し

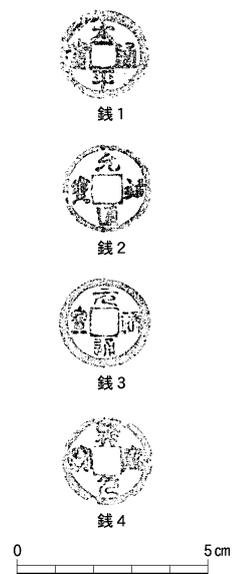


図38 銭貨拓影 (1:2)

て立ち上がる。材質は珪質頁岩である。

(9) 土製品 (図 40)

土製品は轡の羽口、取瓶、不明製品、鑄型、押形製品などがあり、2区の整地層掘り下げ、廃棄土壙 SX10 から出土している。特に取瓶の破片出土が多かった。1点は2区 SX10 出土遺物として概説済みである。

轡の羽口 (土 1) 轡の羽口先端部である。円形筒状で孔を有する。外面には熱を受け溶解した銅滓が多分に付着する。内径 3.0 cm、外径 5.0 cm 前後、残存長約 5.5 cm。2区廃棄土壙 SX10 から出土。

取瓶 (土 2) 全体に丸みを持った体部で、器高低い。口縁部は丸く収める。強い熱を受け外面は、にぶい赤褐色を呈する。内面には緑しようや銅滓の付着が認められる。2区廃棄土壙 SX10 から出土。

不明製品 (土 3) 製品の一部である。円柱状で径 4.7 cm、残存高 2.5 cm。片部は欠損している。残存部端面は内反り気味で中央が凹む。周縁に粘土を貼った痕跡が認められる。欠損部断面には籾殻の痕跡が多分に残る。

鑄型 (土 4) 鏡の鑄型 (粗型) である。円形で径は約 11.0 cm、器高 1.8 cm。胎土にはスサが入られる。成形はヘラ工具で格子目を施す。表面には、真砂の痕跡などは認められない。中央には穿孔の縁部が一部残る。⁹⁾

押形製品 (土 5) 船形状の土形である。側面はヘラケズリ成形。裏表面共に離れ金雲母が付けられる。表面には五輪塔が陽刻され、中に汎字で阿弥陀如来を表す。

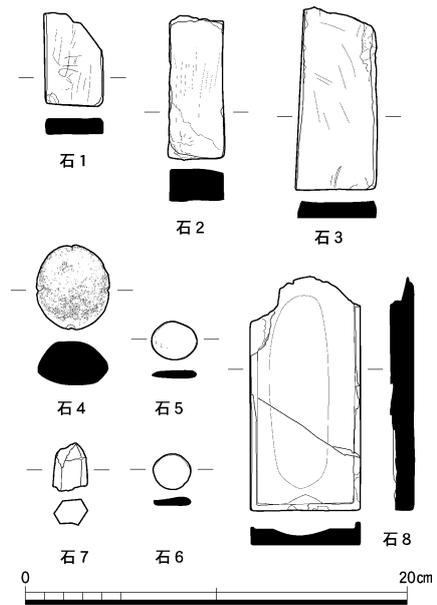


図 39 石製品実測図 (1 : 4)

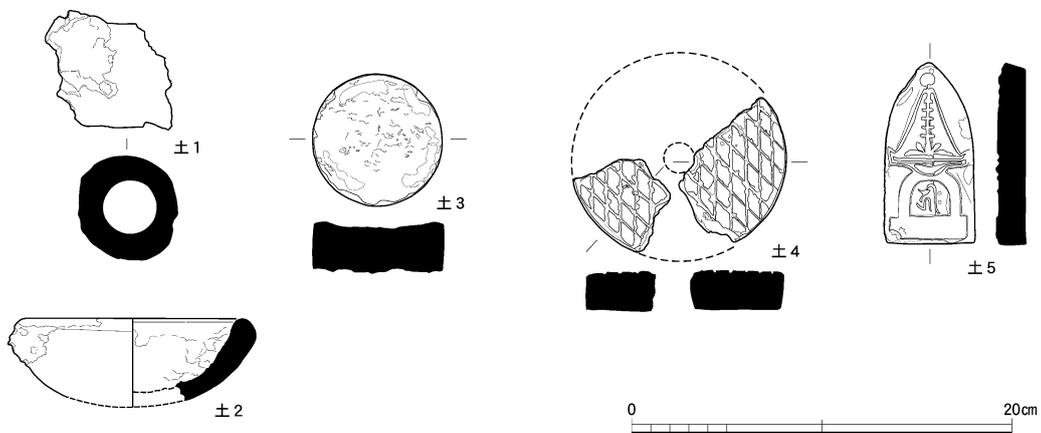


図 40 土製品実測図 (1 : 4)

(10) ガラス製品 (図 41)

鉛ガラス製品 (ガラス 1) は輸入製品の簪である。透明感のあるブルーの色合い。断面円形で棒状、端部は扁平な玉縁状を呈する。材質は鉛ガラスである。2区廃棄土壌 SX10 より出土。迎賓館 (平安京左京北辺四坊) で類例品が出土している¹¹⁾。



図 41 2区 SX10 出土ガラス製品実測図 (1 : 1)

(11) 骨角製品 (図 42)

(骨 1) は鹿の角を加工した耳搔きである。全長 7.4 cm、幅 0.4 ~ 0.2 cm。断面楕円形で棒状、先端が細くなり耳搔き部を有する。先端から 1.1 cm の位置に紐を通す、径 0.15 cm の小孔が穿たれ、耳搔き先端部は平坦面から内湾する。2区廃棄土壌 SX10 より出土。

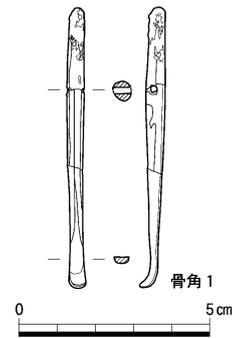


図 42 2区 SX10 出土骨角製品実測図 (1 : 2)

(12) 土壌サンプル分析 (図 43、付表 5)

今回の調査で、1区の堀状遺構 SX 8、2区廃棄土壌 SX10 のおいてのみ、土壌サンプルとして持ち帰り、サンプル洗浄後に種子分析を行った結果の概要を概説する。

1区 SX 8、2区 SX10 共に主体となる種子は水辺・田・路傍などに植生する植物が多いことが確認できた。特に湿った場所に植生する種子が特に目立つ。また植物以外に食物残渣、ゴミに集まるハサミムシ、昆虫などがあげられる。SX 8 は堀として機能しながら、ごみ捨てとしても利用されたことが窺い知れる。SX10 は上記のサンプル以外に採取したものとして、鑄造関連の遺物片

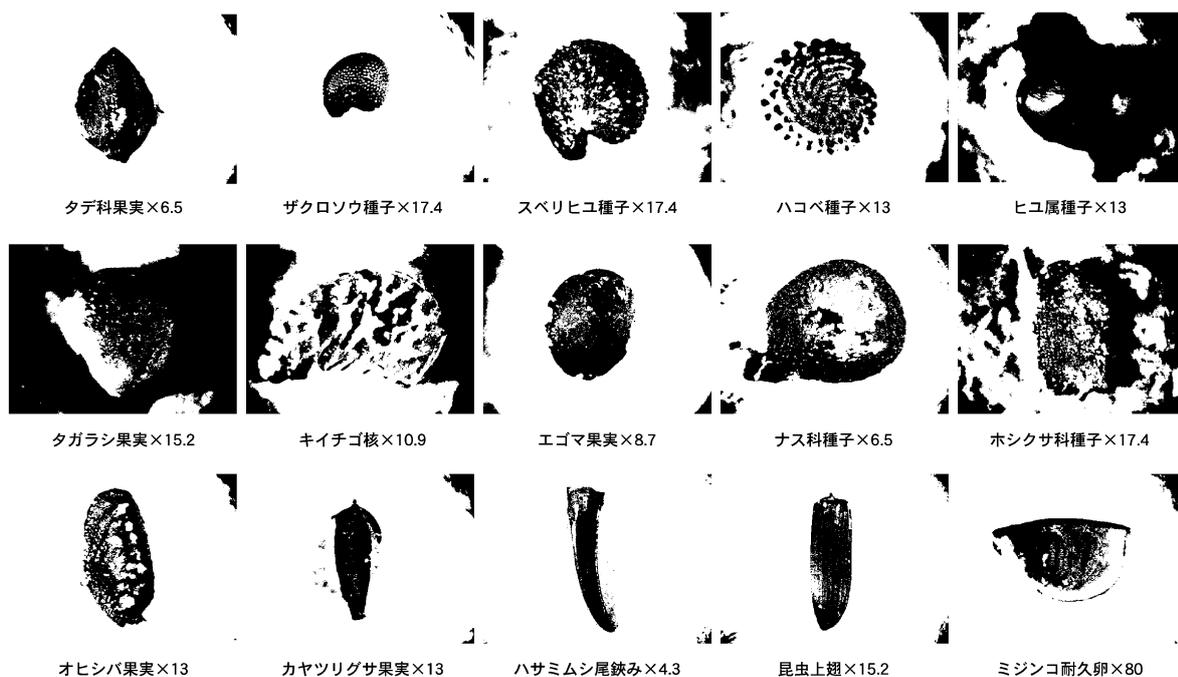


図 43 1区 SX 8・2区 SX10 検出自然遺物

表4 1区SX8・2区SX10 検出自然遺物分類表

1区堀状遺構SX8下層		その他リスト	主な植生・生息環境・備考
種子リスト	主な植生・生息環境・備考	トゲ	
タデ科果実	路傍・水辺	魚鱗・魚骨	食物残滓
ハコベ属種子	路傍・田	ハサミムシ尾鉋	ごみ溜め
ツメクサ種子	庭・路傍	ミジンコ耐久卵	水中
ノミノフスマ種子	荒地・田の畔	フンバエモドキの一種	ごみ溜め
ザクロソウ種子	路傍・畑	他昆虫	
スベリヒコ種子	いたるところ	2区廃棄土壌SX10下層	
ヒコ属種子	畑・路傍	種子リスト	主な植生・生息環境・備考
タガラシ果実	田・溝	タデ科果実	路傍・水辺
ヘビイチゴ属核	路傍・湿った所	ハコベ属種子	路傍・田
カタバミ属種子	庭・路傍	ノミノフスマ種子	荒地・田の畔
エノキグサ種子	畑・路傍	ザクロソウ種子	路傍・畑
サンショウ種子	食物	スベリヒコ種子	いたるところ
ウリ種子	食物	ヒコ属種子	畑・路傍
ツボクサ果実	田・路傍	キイチゴ属核	いたるところ
シソ科果実	食物	カタバミ属種子	庭・路傍
エゴマ果実	食物	ウリ種子	食物
ナス種子	食物	エゴマ果実	食物
タカサブロウ果実	路傍・田の畔	ナス種子・ナス科種子	食物
ホシクサ科	水辺・田	タカサブロウ果実	路傍・田の畔
オヒシバ果実	路傍	イネ科類	食物
イネ科類	食物	カヤツリサ果実	田・畑・湿った所
カヤツリグサ果実	畑・湿った所	その他リスト	主な植生・生息環境・備考
カヤツリグサ科果実	田・畑・湿った所	マツ葉・桧の小枝	
		鳥骨・獣骨	食物残滓

(取瓶、銅滓など)があげられる。

4. まとめ

今回の調査で、1・2区とも桃山時代から江戸時代初頭と室町時代後期の遺構群を検出することができた。前述したように両地区は平安時代は平安京三条三坊九町の北端部中央、二条大路の南に該当する。平安京の地割り制度、四行八門で示すと、1区は西二行・三行界の境と北一門・二門界の境の交差点に位置する。2区は北一門・二門にまたがり位置する。中世は町衆自治の拠点となった、上京と下京を結ぶ室町通の東に位置する。以下、各調査区の成果を時期を追ってまとめたい。

今回の成果としてあげる遺構には、桃山時代から江戸時代初頭・前期遺構がある。1区では路面状遺構14、その下層の堀状遺構SX8である。路面状遺構14は堀を埋めた直後に整地造成されており、出土した土器などからも堀との時期差はあまり見られない。路面状遺構は旧路面とも考えられるが、礫の広がりには東には展開せず、北に展開する様相がある。路面の南北側溝などは調査区の限界から検出には至っていないことから、宅地内の通路の可能性もあり、明確な判断はできていない。

堀状遺構SX8は南北を西二行・三行ライン中央に並び、北一門・二門界を超えて延長する。断面形状などから、幅が5mを超える二段落ちV字状堀を推定している。上杉本洛中洛外図には室

町通を中心に堀が描かれており、戦国期京都都市図¹²⁾などにも堀が調査地周縁に点在して推定されている。1988年の三条三坊十六町調査¹³⁾では室町時代後期の二条大路南側溝が検出され、1989年の三条三坊九町調査¹⁴⁾では桃山時代から江戸時代初頭の南北堀が検出されている。今回検出した堀も同様に町の地割り、宅地の東限にあたる構の堀として考える。しかし現在のところ、この堀が二条通を横断、あるいは二条通で東西に屈曲するのか、また南へどこまで延びるのかは不明である。出土した土器はXI期古の土器群が多数を占め、X期新の様相をもつ土師器もわずかに見られた。このことからおそらく16世紀中頃に堀は成立していると考えられる。この地に金・銀・朱座の各座が設置され、両替町が開かれた時期が江戸時代、慶長八年（1608年）から翌年にかけてのことであり¹⁵⁾、この時に堀は、一気に埋められ、その直後に路面状遺構、整地面が増設されたと考える。

2区の第1面で検出した石室基底部SX 1、建物柱穴列SB002、建物礎石列SB001は規模の大きなもので江戸時代前期以降の遺構として考える。北一門・二門推定ライン付近で区画が変わり、SX 1・SB002とSB001が南北に分かれる可能性が窺える。出土遺物は少なく、古期の混入遺物が多く、正確な時期判断はできないが、これらの遺構の年代は江戸時代前期以降の17世紀中頃に属する遺構と思われる。

第2面には1区SX 8と時期を同じくする遺構群が多い。同時期の遺構として挙げられる遺構として、廃棄土壙SX10、土取穴SX82、東西柵2列(SA003A・B)、井戸SE 2がある。この時期になると区画の一部が、見えてくる。北一門・二門推定ライン付近で区画が北と南に分かれ、東西柵2列は西にSE 2を伴う遺構と考えられる。そして北西部と西部中央に位置したSX10、SX82は北に位置する区画内の遺構と考えられる。その東側には遺構が検出できなかったことから宅地の空闲地であり、ゴミの廃棄などに利用されたものであろう。これらの遺構からの出土遺物は多く、XI期古に属するものとして、1区SX 8の土器群と時期を同じくするものである。また出土遺物の中に鑄造関連遺物や銅滓などが含まれることから、宅地内はこの時期鑄造に関連する場所であった可能性もある。

第3面は南北の区画が、より一層に明確になる。北一門・二門推定ラインに沿い、東西柵SA004の8.5 m間にPitが並ぶ。北に約4 mのラインにも、東西間にPitが散見できる。しかし東西間の区画に関する遺構群として以外は、正確な遺構の位置づけは今のところできていない。出土遺物は少ないながら、X期に相当する土師器皿を採取し、土層面からも室町時代後期の遺構と位置づけた。

今回の調査では室町時代後期以前の遺構数は非常に少なかった。これらは近世初頭の土取りや整地造成によるものとする。今回検出できた遺構は1区SX 8肩口のPit、2区SA004やPit群を除き、土器群から織田信長が京都屋敷を建設し始める天正四年（1576）、本能寺の変で織田信忠がこの屋敷で討ち死にしたと伝えられる天正十年（1582）よりも時期を新しくするものが多かった。おそらく桃山時代から江戸時代初頭に属する町家関連遺構であり、出土遺物の茶陶関係、漆器類からは、ある程度の階級に属する都市階級層の宅地跡が推定できる。

またこの地においては、堀・土取穴・廃棄土壙から出土した土器類や漆器製品の時期が一括に

限定されるなど、この地域は短期間に整理された状況を窺い知れた。調査地は二条城に近く、主要道路であった二条通、室町通が隣接することも、その一つの理由に挙げられる。おそらく初期徳川政権により、この地域周辺は近世への変貌をいち早く受けたものと考えられ、今後は下京二条通、室町通周辺の調査、新規調査を含め、改めて考えてみる必要があると考える。

註

- 1) 『平安京提要』(財)古代学協会・古代学研究所 1994年
- 2) 「京都市内およびその近辺の中世城郭」『京都大学人文科学研究所調査報告 第35号』復元と関係資料 山下正男 1986年
- 3) 『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1993年
- 4) 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-7 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 5) 小森俊寛・上村憲章『研究紀要 第3号』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 6) 「名碗と考古学」『遺跡出土の朝鮮王朝陶磁』茶道資料館 1990年
- 7) 『平安京古瓦図録』平安博物館 1977年 遺物番号1と同文
- 8) 『坂東善平収蔵品目録』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年 遺物番号255と同文
- 9) 網申也『研究紀要 第3号』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 10) ガラス分析は、北野信彦氏(くらしき作陽大学)にお願いした。
- 11) 『平安京左京北辺四坊 第2分冊(公家町)』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2004年
- 12) 高橋康夫『京都中世都市研究』恩文閣出版 1983年
- 13) 『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1980年
- 14) 註3と同じ
- 15) 『史料京都の歴史 第九巻 中京区』平凡社 1985年

5. 付章 漆器資料の材質・技法に関する調査

北野信彦

(1) はじめに

二条殿跡は、織田信長の京都屋敷跡遺跡と考えられており、ここからは近世初頭期の遺構と遺物が検出された。この中には、漆器資料も含まれており、今回、これらの材質・技法に関する文化財科学的調査を行ったので、その結果を報告する。

(2) 出土漆器の調査

2.1 調査対象資料

今回調査を行った漆器資料は、ろくろ挽き物である椀類である飲食器資料が7点、用途不明の器物が1点、折敷側板などの板物破片が1点の合計9点である。いずれも実用性が高い近世初頭期の生活什器類である。

2.2 調査方法

一般に漆器の製作は、原木から木地をつくり、ろくろ挽き作業により挽き物の椀の形態や、折敷・膳・髷物などの板物にする「木胎製作」の工程と、その木胎に下地および漆を塗布し、漆絵などの加飾や研磨作業を行う「漆工」の工程から成っている。本報では、まず各資料の器形や残存状態、漆塗り表面の状態などを肉眼観察した後、実体顕微鏡による細部の観察を行った。次に、自然科学的手法を用いた、①木胎の樹種同定、②木取り方法、③漆塗り構造の分類、④赤色系漆の定性分析、などの材質・技法の組成に関する調査を行った。以下、調査方法を記す。

(1) 木胎の樹種同定

樹種の同定は、出土木材の内部形態の特徴を顕微鏡で観察し、その結果を新材と比較することでなされる。試料は、本体をできるだけ損傷しないよう、破切面などオリジナルでない面から木口、柀目、板目の三方向の切片をカミソリの刃を用いて作成した。切片は、サフラニン・キシレンを用いて常法に従い染色と脱水を行い、検鏡プレパラートに仕上げた。

(2) 木取り方法

挽き物類である漆器資料の木取り方法の検討は、樹種同定の切片作成時に細胞組織の方向を生物顕微鏡で確認することで、同時に行った。

(3) 漆塗り構造の分類

まず肉眼で漆塗り表面の状態を観察した後、実体顕微鏡を用いた細部の観察を行った。次に1mm×3mm程度の漆膜剥落片を採取して合成樹脂（エポキシ系樹脂／アラルダイトGY1251J.PハードナーHY.837）に包埋した後、断面を研磨した。この断面試料の漆塗膜面の厚さ、塗り重ね構造、顔料粒子の大きさ、下地の状態などについて、金属顕微鏡による落射観察を行い、一部の代表的な漆器については生物顕微鏡を用いた薄層の透過観察を併用した。

(4) 赤色系漆の使用顔料

赤色系漆の使用顔料に関する定性分析は、採取可能な部分の漆膜剥落片をカーボン台に取り付け、日立製作所 S-415 型の走査電子顕微鏡に堀場製作所 EMAX-2000 エネルギー分散型 X 線分析装置 (EPMA・電子線マイクロアナライザー) を連動させて使用した。分析設定時間は 600 秒。さらに、クロスチェックを行うために (株) 堀場製作所 MESA-500 型の蛍光 X 線分析装置に設置して、特性 X 線を検出した。設定条件として、分析積算時間は 600 秒、試料室内は真空状態、X 線管電圧は 15kV および 50kV、電流は 240 μ A および 20 μ A、検出強度は 40.000cps、定量補正法はスタンダードレスである。

2.3 調査結果

以上、9 点の出土漆器試料の分析を行った (表 5)。まず、本漆器資料の樹種同定を行った結果、挽き物類である椀型資料は、いずれも広葉樹材が選択されており、バラ科サクラ亜属 (1 点)、ケヤキ (1 点)、トチノキ (5 点) であり、用途不明の器物ではホオノキ (1 点)、板物側板では針葉樹のヒノキ材 (1 点) が用いられていた。そして挽き物類である椀型資料の木取り方法は、いずれも横木地の板目取りが確認された (図 44)。

通常、江戸時代中期以降の椀木地の用材にはトチノキ・ブナ・ケヤキ材が中心となるが、中世後期から近世初頭期段階には、全国的に樹種の多様性が見出され、とりわけクリ・コナラ・シオジ材の使用が特徴的である点が調査者のこれまでの基礎調査で明らかになっている (表 6)。本漆器資料群の場合、ケヤキ・トチノキ材で全体の 85.7%、とりわけトチノキ材が全体の 71.4% の高い占有率を占めており、この点が本資料群の大きな特徴である (図 46)。これは入手可能な用材は幅広く集荷して使用する傾向とは異なり、挽き物類の用材としては適材であるケヤキ・トチノキ材を選択的に使用するいわゆる都市部の居住者における漆器使用の傾向とも考えられる。

次に、個々の資料の漆塗り構造、特に各漆器の堅牢性を知る目安となる木胎と漆塗り層との間の下地層をみると、無機物を含んでいないためピークがほとんど見出だされない資料と、Al (アルミニウム)、Si (シリカ)、K (カリウム)、Ca (カルシウム)、Fe (鉄) など粘土鉱物もしくは珪藻土の構成要素に近いピークが認められる資料に分けられた。さらにこれらを顕微鏡観察することにより、前者を、炭粉を柿渋や膠などに混ぜて用いる炭粉下地、後者を、細かい粘土もしくは珪藻土を生漆に混ぜて用いるサビ下地 (堅下地もしくは本下地ともいう) と理解した。そして、椀型試料の場合、木胎部にトチノキ材を使用した椀型資料を中心に炭粉下地の上に薄く黒漆層や朱漆を 1 層塗布した漆器資料が 71.4% を占めていた (図 47)。このような炭粉下地の上に薄い上塗り漆層を塗布する技法は、中世末から近世初頭期における実用的な出土漆器椀類に一般的にみられる特徴である。そして、加飾の漆絵は地の上塗り漆の上に描かれていた (図 45)。一方、地塗りに内外赤色系漆を塗布した椀型資料と板物類では、いずれもサビ下地を施したやや優品であった。このうちの資料 1 は、木胎の上にまず炭粉下地を施し、その上にサビ下地をさらに施すタイプであり、これは近世初頭期の椀型資料でみられる特徴の一つである (図 48)。

また、資料 9 の折敷側板破片資料は、優良材であるヒノキ材の木胎の上に堅牢性を重視した布着せ補強を伴うサビ下地が施され、その上に中塗りの黒漆を塗布し、さらに上塗りの朱漆が塗り

重ねられていた。これは、漆工史の分野では中世漆器を代表すると位置づけられている「根来系朱漆器」では、統的もしくは典型的とも評せられる技法である（図 49）。そしてこの資料は、粒度が均質で細かく揃った朱顔料による良好な赤い発色を呈する朱漆が、内外面ともに上塗りされており、良質な漆器であったことが理解される。次に、本漆器資料における赤色系漆の使用顔料を電子線マイクロアナライザーおよび蛍光X線分析した結果、いずれも水銀（Hg）成分が強く検出され（表 7）、さらに顕微鏡観察でも、朱（辰砂もしくは水銀朱 HgS）の赤色顔料の粒が確認された。そして個々の資料の朱顔料粒子は、極めて細かく粒度が揃った資料と、やや粒度が大きい資料、黒漆に朱粒を混入した資料の 3 種類のグループに分類された。いずれにしても、本漆器資料群の赤色系漆は、いずれも朱漆であった。ベンガラ漆に比較して朱漆が卓越する傾向は、中世から近世初頭期における漆器の特徴である。

以上のことから、本漆器資料群は、近世初頭期の特徴をよく反映した資料群であるが、サビ下地を施した資料が全体の 44.4% を占めており、一般的な生活遺跡の場合 10～20% 台であることを考慮に入れると、基本的にはやや優品が多いといえよう。

（引用文献）

北野信彦 (2005) 『近世出土漆器の研究』 吉川弘文館

北野信彦 (2005) 『近世漆器の産業技術と構造』 雄山閣

北野信彦 (2005) 『漆器の考古学 - 出土漆器からみた近世という社会 -』 あるむ出版

表 5 漆器観察表

No.	出土遺構	器形	樹種	木取	表面塗り技法			漆塗構造		使用顔料			備考
					内	外	文様	内	外	内	外	文様	
漆 1	SX 8	椀	ケヤキ	A	赤	赤		X	X	朱	朱		
漆 2	SX 8	椀	トチノキ	A	赤	黒		I	I	朱			
漆 3	SX82下層	椀	トチノキ	A	赤	黒		I	I	朱			
漆 4	SX 8	椀	トチノキ	A	赤	赤	外-絵-黒	V	VI	朱	朱		草木・果実
漆 5	SX10下層	椀	バラ科サクラ亜属	A	黒	黒	内外-絵-赤	II	II			朱	檜垣・葉
漆 6	SX82下層	椀	トチノキ	A	黒	黒	内-絵-赤	II	I			朱	内-鶴? 外-草木
漆 7	SX82下層	椀?	トチノキ	A	黒	黒	外-絵-赤	I	II			朱潤	
漆 8	SX82下層	器物破片	ホオノキ	-	黒	黒		V	V				
漆 9	SX82下層	板物側板	ヒノキ	-	赤	赤		VII	VII	朱	朱		布着せ補強:黒-朱

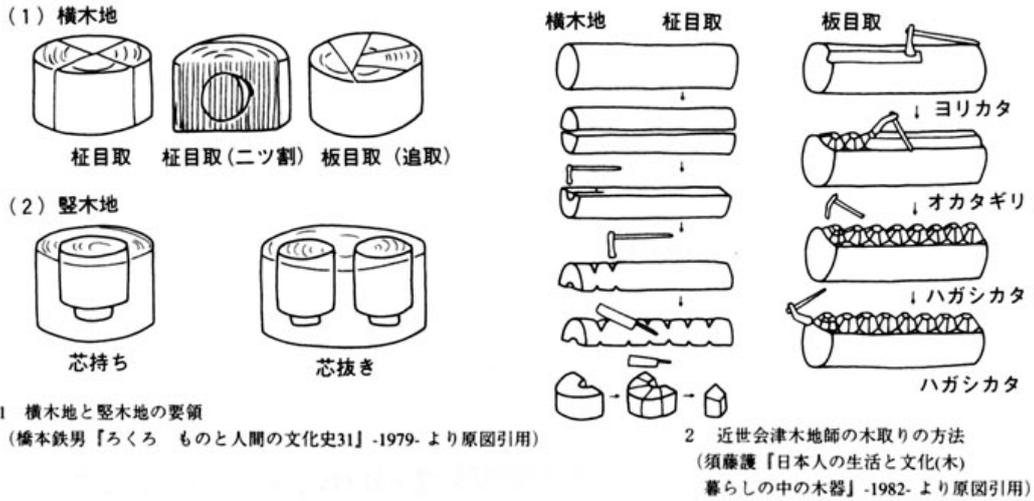


図 44 近世以降の漆器（挽き物類）の木取り方法

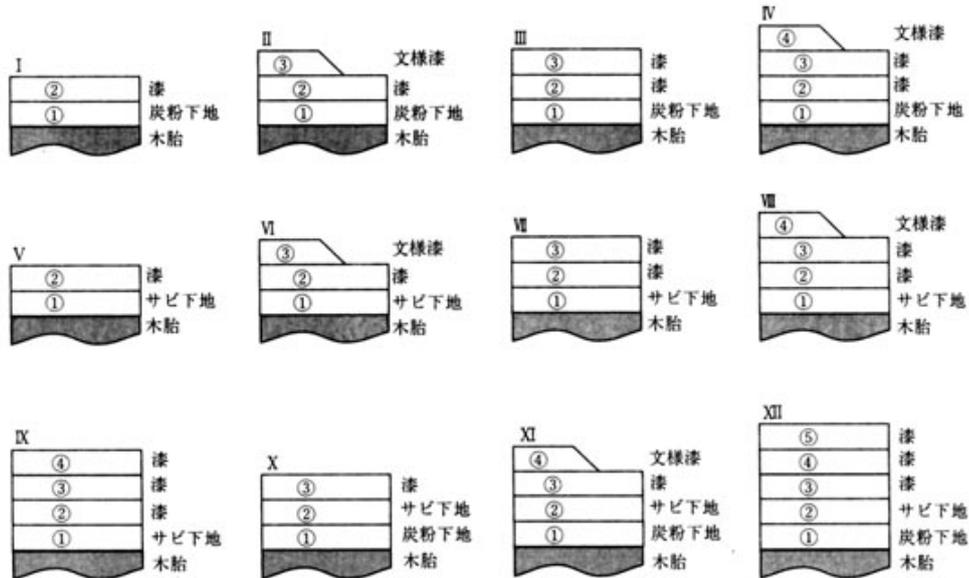


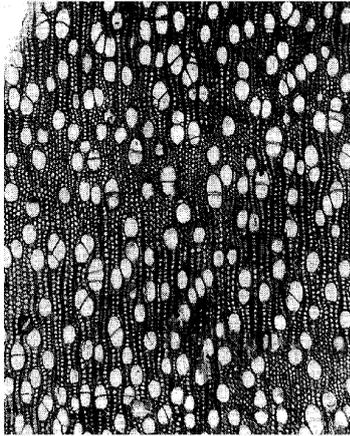
図 45 漆塗り構造の分類

表 6 ろくろ挽き物の用材分類一覧表

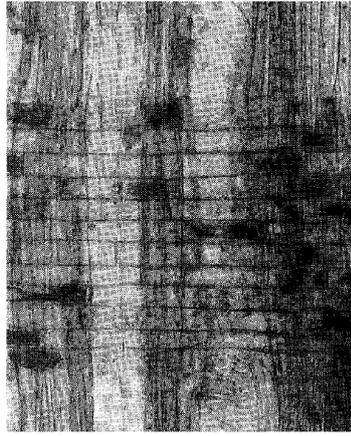
A 環 孔 材	a. ケヤキ系 ニレ、ケヤキ、シオジ、ハリ ギリ、クリ、ヤマグワなど	木目が明瞭に表れる。堅硬であるが靱性もあり、木皿など薄手の物に適する。
	b. サクラ、カエデ系 イタヤカエデその他のカエデ 類、ヤマザクラ、ウワミズザク ラ、ミズメなど	白木で美しい光沢があり、白木地物にも適している。割れ狂いが少なく、やや堅さはあるが加工は容易。下地が少量で足りるので、塗り物にもっとも適する。
B 散 孔 材	c. ブナ、トチノキ系 トチノキ、ブナ、ミズキ、カ ツラ、ホオノキなど	軟らかくて加工は容易であるが、乾燥が難しく狂いも多い。しかし、大量に入手できるので使用量は大きである。
	d. エゴノキ系 エゴノキ、アオハダなど	白い軽軟で加工が容易である。仕上げは見た目によく、彩色もし易いので、玩具、小物等に向いている。とくにエゴノキは大材を得られないが、入手が容易であり、割れにくいので使用に適する。

橋本鉄男『ろくろ ものと人間の文化史31』-1979-などを参考にして作成

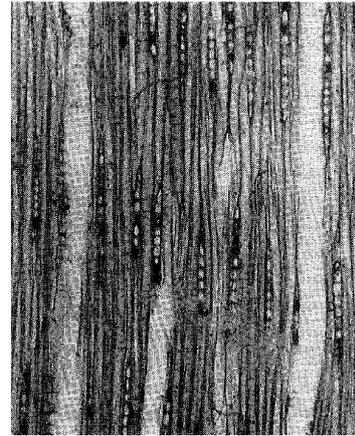
とちのき科トチノキ



木口 (30×)

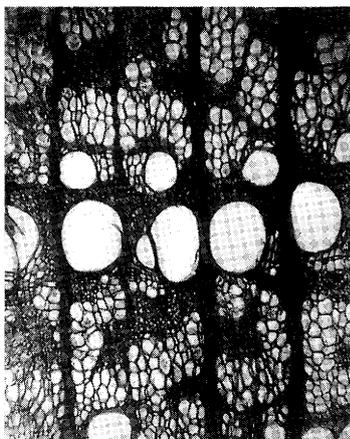


柁目 (100×)

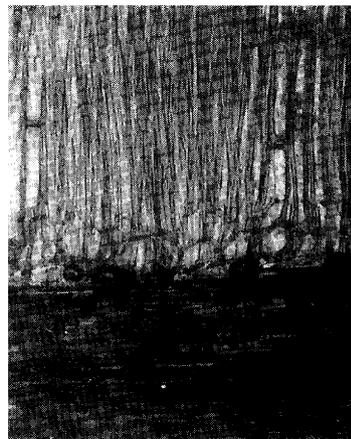


板目 (50×)

にれ科ケヤキ



木口 (30×)



柁目 (100×)



板目 (50×)

図 46 漆器木材顕微鏡写真

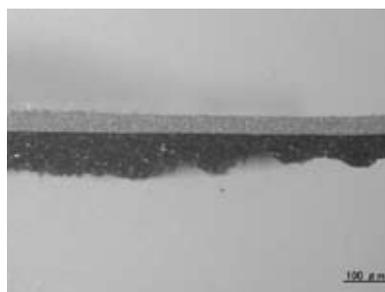


図 47 漆塗り構造 I 顕微鏡写真

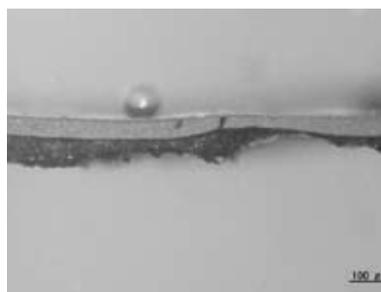


図 48 漆塗り構造 X 顕微鏡写真

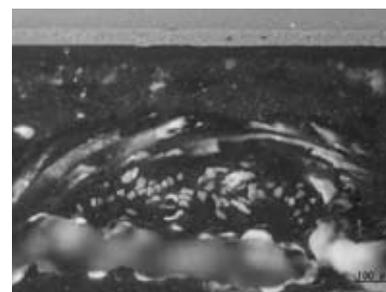


図 49 漆塗り構造 VII 顕微鏡写真

表 7 漆器成分分析表

50,000ops



付表1 1区堀状遺構SX8出土掲載土器一覧表

番号	器種・器形	口径	器高	底径	器表色調	断面色調	残存	備考
1	土師器皿Nr小	5.4	1.2		2.5Y7/2		完存	
2	土師器皿Nr小	6.0	1.2		10YR7/3		完存	
3	土師器皿Sb	9.8	2.3		7.5YR7/4		80%	
4	土師器皿S	10.9	2.2		10YR8/3		35%	
5	土師器皿S	13.2	2.2		7.5YR7/4		30%	
6	土師器おほじき				7.5YR8/4		完存	径2.2 厚さ0.5 土師器皿を打欠き成形する
7	瓦器火鉢	24.1			N2/0	7.5Y7/1	25%	最大径27.0
8	備前鉢	19.0	4.5	11.0	10R6/8	N6/0	15%	最大径19.3
9	信楽播鉢	29.2			10R5/6		25%	播り目5本1単位
10	丹波播鉢	35.2			5YR7/4		10%	播り目単線
11	丹波播鉢	38.2			5YR7/4		15%	播り目単線
12	美濃鉄釉折縁皿	11.0	2.3	5.6	5YR3/4		完存	内外面にメアト
13	美濃折縁ソギ皿	10.8	1.8	5.4	7.5Y6/3		45%	内面底部露胎、高台裏にメアト
14	美濃天目椀	11.0	6.7	4.3	7.5YR2/2	N7/0	75%	茶筌痕跡残る
15	美濃天目椀	11.5	6.2	4.1	5YR3/6		70%	
16	美濃天目椀	11.6	6.3	4.5	5YR3/6	N8/0	55%	
17	唐津椀			4.1	5YR4/3		40%	釉7.5YR6/3、高台畳み付けにメアト

付表2 2区土壌SX82出土掲載土器一覧表

番号	器種・器形	口径	器高	底径	器表色調	断面色調	残存	備考
18	土師器皿Nr小	5.3	0.9		10YR7/2		50%	
19	土師器皿Nr小	5.6	1.1		7.5YR7/3		50%	
20	土師器皿Sb	9.3	1.9		7.5YR7/4		95%	
21	土師器皿S	9.5	2.3		7.5YR6/4		70%	トリベに転用
22	土師器皿S	10.1	2.3		7.5YR6/4		40%	トリベに転用
23	土師器皿S	10.6	2.1		2.5YR7/3		30%	トリベに転用
24	土師器皿S大	12.2			N3/0	2.5Y8/2	25%	
25	土師器焙烙	29.0	6.9		10YR1.7/1	10YR7/3	70%	
26	土師器香炉	20.6	6.0		7.5YR7/4		65%	内面に弁柄付着
27	埴塼	12.0	5.0		10R6/2		50%	口縁部ケズリ 外面底部糊殻圧痕残す
28	丹波播鉢	30.8	12.8	13.8	10R4/2	5Y6/1	10%	播り目単線
29	備前播鉢				2.5YR5/6	N6/0	小片	播り目不明
30	信楽播鉢	29.1	12.7	13.8	2.5YR6/6	2.5Y8/1	30%	播り目5本1単位
31	美濃鉄釉皿	10.2	2.4	5.7	5YR2/4	10YR8/1	55%	
32	美濃鉄釉皿	10.6	2.6	5.8	2.5YR4/3	N7/0	50%	内外面にメアト
33	美濃鉄釉皿	10.8	2.6	6.0	2.5YR2/2	N7/0	60%	内外面にメアト
34	美濃鉄釉皿	10.8	2.6	6.1	2.5YR3/4	N7/0	70%	鉄釉の上から透明釉垂らし掛け
35	美濃灰釉折縁皿	11.3	2.0	5.8	5Y7/3	5Y6/1	75%	5方向に2本の鎬
36	美濃灰釉皿	9.8	2.4	4.3	10Y6/2	2.5Y7/3	90%	内外面にメアト 釉透明
37	美濃長石釉皿	10.9	2.7	6.3	5Y7/1	7.5Y8/1	40%	総釉 外面底部輪状のメアト
38	美濃天目椀	11.7	6.4	4.3	5YR3/3	7.5YR8/2	80%	露胎部2.5YR6/5
39	美濃天目椀	12.1			5YR6/6	7.5YR8/2	70%	釉2.5YR3/3
40	輸入白磁盃	6.7	3.9	3.2	白色		20%	
41	輸入白磁皿	11.2	2.1	5.7	白色		30%	
42	李朝灰釉茶椀	14.9	6.0	5.8	5Y6/2	5YR7/4	60%	土灰釉総掛け 内外面にメアト

付表3 2区廃棄土壌SX10出土掲載土器一覧表

番号	器種・器形	口径	器高	底径	器表色調	断面色調	残存	備考
43	土師器皿Nr小	5.4	0.9		10YR8/2		完存	
44	土師器皿Nr小	5.4	1.2		10YR8/2		完存	
45	土師器皿Nr小	5.6	1.0		10YR7/2		完存	
46	土師器皿Nr大	7.4	1.4		10YR8/3		完存	
47	土師器皿Nr大	7.2	1.4		2.5Y8/1		50%	
48	土師器皿Sb	9.2	2.0		10YR7/4		55%	
49	土師器皿S	9.4	2.0		5Y8/2		40%	
50	土師器皿S	10.2	1.9		2.5Y8/1		完存	

番号	器種・器形	口径	器高	底径	器表色調	断面色調	残存	備考
51	土師器皿S	10.4	2.3		7.5YR8/2		40%	
52	土師器皿S	10.7	2.1		2.5Y8/2		50%	
53	土師器皿S	11.2	2.1		10YR7/1		50%	
54	土師器皿S	11.8	2.4		10YR8/2		25%	
55	土師器皿S	12.8	2.1		10YR8/2		25%	
56	土師器焙烙	36.6			10YR8/3		15%	方形状の口縁
57	土師器焙烙	30.7			7.5YR6/3		35%	玉縁状の口縁
58	土師器小型丸底壺	2.9	2.2		2.5Y8/1		完存	最大径3.6
59	土師器小型丸底壺	2.7	2.5		2.5Y8/1		完存	最大径3.6
60	土師器小型丸底壺	2.5	2.5		5YR5/3		完存	最大径3.6
61	瓦器丸底鉢	10.2	7.3		N7/0	10YR8/1	45%	内面円滑
62	瓦器ミニチュア羽釜	2.0			N6/0	2.5Y8/2	90%	最大径4.8
63	瓦器ミニチュア羽釜	5.5	6.2	4.0	N3/0	N7/0	90%	最大径4.0
64	備前播鉢	33.2			7.5R4/3		10%	播り目斜め方向、5本1単位か？
65	信楽播鉢	33.3	11.5		2.5YR6/8		15%	播り目5本1単位
66	丹波播鉢	30.5	14.2	12.1	10R5/6		40%	播り目単線
67	美濃灰釉盃	6.3	2.4	2.8	5Y5/4		50%	
68	美濃長石釉盃	7.8	3.0	4.7	2.5Y8/2	7.5Y8/1	30%	
69	美濃鉄釉皿	10.6	2.8	5.6	5YR4/6		65%	口縁を指で押さえて輪花とする
70	美濃鉄釉皿	10.6	2.2	6.3	5YR4/6		40%	内外面にメアト
71	美濃鉄釉皿	10.9	2.7	6.2	5YR4/6	5Y5/1	30%	内外面にメアト
72	美濃灰釉皿	10.8	2.7	6.4	5Y7/2		20%	トリペに転用
73	美濃灰釉皿	10.8	2.8	5.8	5Y7/3		80%	内外面にメアト
74	美濃灰釉皿	10.8	2.5	6.0	5Y7/3		70%	内面底部露胎 釉透明
75	美濃長石釉皿	12.2	2.4	6.0	7.5Y8/1	10Y8/1	30%	外面にメアト
76	美濃天目椀	11.8	6.6	4.2	2.5YR5/6		70%	露胎部赤化粧 釉2.5YR4/4
77	美濃鉄釉筒茶椀	11.0			5YR3/4		70%	
78	瀬戸黒茶椀	13.0			N2/0	N7/0	25%	縦のヘラ調整は見られない
79	志野茶椀	11.8	8.5	6.0	7.5YR8/2	5Y8/2	70%	絵付け檜垣文
80	美濃灰釉四方向付			6.3	7.5Y6/3	7.5Y8/1	40%	
81	志野向付	9.8	5.8	5.3	2.5Y8/1		75%	内面に針トチ3方向
82	志野向付	10.0	4.5	6.3	7.5Y8/2	7.5Y8/2	70%	内面に針トチ
83	志野水指	8.6			白色	2.5Y8/3	20%	絵志野であるが図柄不明
84	唐津椀	10.0	6.2	4.2	2.5YR5/4	N7/0	70%	釉7.5Y4/3 青唐津
85	明染付椀			4.1		白色	30%	
86	明染付皿	10.2	2.1	5.6		白色	50%	呉須で人物像絵付け
87	明染付皿	12.4	3.0	6.2		白色	50%	呉須草花文滲む
88	須恵器鉢	13.8	8.4	7.4	N7/0		50%	最大径15.6 外面底部磨滅し平滑 墨書あり

付表4 2区土壙SK27出土掲載土器一覧

番号	器種・器形	口径	器高	底径	器表色調	断面色調	残存	備考
89	土師器皿Sb	9.9	2.2		10YR8/3		60%	
90	土師器皿S	10.6	2.1		7.5YR8/4		50%	
91	土師器皿S	12.8	2.1		10YR8/3		50%	

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょうさんじょうさんぼうきゅうちょうあと							
書名	平安京左京三条三坊九町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2006-15							
編著者名	大立目 一							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2006年11月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうさきょう 平安京左京 さんじょうさんぼう 三条三坊 きゅうちょうあと 九町跡	きょうとしなかがきょうく 京都市中京区 りょうがえまちどおりにじょう 両替町通二条 さがるきんぶきちよう 下る金吹町 ちない 地内	26100		35度 00分 47秒	135度 45分 31秒	2006年7月 21日～2006 年9月12日	183m ²	マンション 新築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京左京 三条三坊 九町跡	都城跡	平安時代～ 室町時代後期	柵、柱穴群	土師器、緑釉陶器、灰 釉陶器、須恵器、瓦				
		桃山時代～ 江戸時代	柵、井戸、土壇、 濠状遺構、路面状 遺構	土師器、瓦器、施釉陶 器、焼締陶器、輸入陶 器、瓦、土製品、木製 品、銭貨、石製品、金 属製品、ガラス製品、 骨角製品、食物残滓				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-15
平安京左京三条三坊九町跡

発行日 2006年11月30日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1

〒 602-8435 TEL 075-415-0521

<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

〒 604-0093 TEL 075-256-0961